
リオと惑いの魔法使い

鏡コノエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リオと惑いの魔法使い

【Nコード】

N2072S

【作者名】

鏡コノエ

【あらすじ】

【ボーイズラブ】

気難しくて人嫌いな魔導師と、いつも元気な小間使いの恋愛ファンタジー。

知人の紹介でやって来たのは、蜘蛛の巣だらけの大きなお屋敷。そこでリオ・アロンは美しい青年と出会うが、爆睡していて何をしてもし起さる気配が無い。

「この人がご主人様？」

事実を知ろうにも青年が起きないことにはわかるはずもなく、確証を得たと思えば、とにかく気難しそうな雰囲気の人だ。おもわず引腰になるリオ。しかも広いお屋敷には謎の人の気配まであって、ご主人様の不機嫌度は上昇していくばかり。小間使いリオは気難しいご主人様とうまくやっていけるのか？

1 小間使いはある日やってきた。

赤茶色した煉瓦敷きの坂を登り終えると、目の前に緑の森が広がって、心地好い風が僕を撫でて行った。

「わ……」

涼しい！

額に滲んだ汗が清涼感とともに引っ込んで、ほっと笑顔がこぼれる。一瞬、森かと思ったそこは、とあるお方のお屋敷だ。

「レーヴィ・エルヴァステイ様。レーヴィ・エルヴァステイ様」

覚えづらい名前を復唱したのは、今日から僕のご主人様になるお方の名前だから。初日から粗相があつてはいけないし、気難しいお方ならそれだけクビってこともあり得るからね。

そもそも新しいご主人様は使用人など探してはいないし、当然お会いしたことなど一度も無い。お名前を知ったのは昨日の夜のことだから、どんなお方かなんて想像も出来ないよ。

僕は僕で色々あつて、数日ご厄介になっただけの人に「この屋敷へ行きなさい」と言われただけの、すつごく曖昧な状態で、ここまで来て新しいご主人様にクビを言われたら、また行き所が無くなってしまう。

ダメダメ！

不安なことを考えたら、不安がやって来てしまうよ。

きつと大丈夫さ！ こう見えても掃除も料理も得意なんだ。

そうだよ！ 僕にだって取り柄はあるんだ。

奥様、見ていてください。

僕はきつと、新しいご主人様に気に入られるような小間使いになつてみせます。そしてこの町でたのしい出来事を見付けてみせますから！

少し揺れ気味だった気持ちを固めたあと、十七歳という僕の年齢よりも三つ年上のトランクを相棒に、蜘蛛の巣だらけの門をくぐつた。

門番はいなかった。庭師も来ていないらしくて、樹木が生い茂るアプローチは鬱蒼とした森のよう。芝生には雑草が我が物顔で背を伸ばして、落ち葉や枯れ葉がもうじき土になろうとしている。

「……空き家じゃないよね？」

そんな心配が浮上してくるような、荒れ果てたお庭だった。

街の真ん中とは思えないほどの広いアプローチを抜け、ようやく屋敷の前に辿り着くと、陰気な佇まいに絶句する。

白壁の壁には蔦が好き勝手に貼り付き、枯れ葉と若葉がぐちゃぐちゃに混ざり合っていた。門も蜘蛛の巣だらけだったけど、アーチ型の玄関の上も立派な王国が出来ていた。タイル張りの床は無数の足跡と枯れ葉でメチャクチャだ。

足跡があるってことは人がいるってことだと思うけど、このお屋敷……本当に大丈夫なのかなあ？

『僕の家族のような人だから心配はいらないよ』

この屋敷へ行くように薦めてくれた人が笑顔で言っていたから、ここへ来るまで安心していたけど、今は何かの間違いだと信じたい自分がいたりして。

もしかして住所を間違ったのかも。

でも煉瓦敷きの坂の上のお屋敷はここだけだし、仕事を薦めてくれた人は「森のようなところに白いお屋敷がある」と教えてくれたから間違いない。

帰りたい。——一瞬浮かんだ弱音を蹴散らすように、僕は頭を振っていた。ずれた丸眼鏡を直したあとで、茶色の髪を手櫛で梳いて、最後にベストの裾を引き下げた。

「そこに楽しいことが待っているかもしれないよ！」

奥様の口癖を声に出して、自分に言い聞かせた。

そこに楽しいことが待っているかもしれないのに、引き返したら何もはじまらない。楽しいことじゃなくなたって、きっと僕にとって

の何かを得ることが出来るんだ。

弱虫な僕に、奥様はそう言って話して聞かせてくれた。だからこのちよつと薄気味悪いお屋敷にだって、きつと僕の知らない何かがある。待っている。

怖いことじゃないといいけど。

痛いのも嫌だなあ。仕事は苦じゃないけど、御飯抜きとかそういうのもちよつとつらい。

ああ……奥様は優しくったからなあ。なんであるとき乗る船を間違えちゃったんだろ。本当なら今頃ヨーロッパを旅行しているはずだったのに。

あゝあ。ワインに合う料理を覚えたかったのになあ……。

いつの間にかしゅんぼりと肩を落としていた僕は、はつと我に返って顔を上げていた。

だ、大丈夫さ！

きつと楽しいことが待っているはずだよ！

ようやく気持ちが始まりドアを叩いた。そして新しいご主人様の名前を心の中で繰り返して待っていたけれど、扉はいつこうに開く気配は無かった。もう一度扉を叩いたけれど、やっぱり同じだった。

それから幾度か繰り返したけど結局同じで、僕は途方に暮れていた。試しに扉を押してみると――。

わっ、開いた……！

誰もいないうえに、扉まで開いてしまった！

「あのっ、ごめんくださいっ」

隙間から大声を出してみたけれど返事は無かった。

「紹介状を持って参りました。リオ・アーロンです！」

尚も大声を出したけど、静かなままだ。そのかわりに埃臭さで鼻がムズムズとなって、クシュンツとくしゃみが出てしまった。

無礼を承知で中へ入ると、絵画に彩られた玄関ホールが僕を静かに出迎えた。高い天井には金と陶器で作られた気品あるシャンデリアに、甘く黒光りする彫刻家具の数々と大理石の彫像たち。

惜しむらくはすべてがすべて埃と蜘蛛の巣だらけだったことだ。

床は砂だらけで無数の足跡と塵が散乱してる。奥へ入ると埃臭さに黴臭さが加わった。

これはひどい。

「掃除だ……掃除しなくっちゃ！」

こんなところに長くいたら身体を悪くしてしまう。美しいお屋敷なのに、なぜこんなことになってしまったのだろう。

決めた！

ご主人様のご挨拶は後だ！ 僕は腕まくりして、まずは掃除用具を探すことにした。

掃除用具はなぜかキッチンテーブルの真ん中にでんと置いてあった。誰かが掃除をするつもりで、そんなところに置いていたのか、それとも片づけるのが面倒で置き去りにしたのか。とりあえず探す手間が省けたというものだ。

裏木戸を開けると井戸があつた。桶に水を汲み、かぴかぴの雑巾を浸して、それからモップは……これは忙しいぞ！

屋敷はとにかく大きい。すぐにすべてをきれいにするには限界があるから、ご主人様の使うお部屋と玄関だけを重点的に作業だ。

ああ、でも。まだ雇ってもらえるときまつたわけじゃないのに、寝室なんか入っていいのかな……？

下手をすれば泥棒にされないか心配だけど、でも庭や玄関ホールがあんな調子だ。キッチンは使われているみたいだけど、食器は汚れたまま放置だし、鍋はいくつも焦げ付いていて使い物になるのかどうか。

こんな調子を見れば寝室だって想像に容易いだろう。

「……うう、想像したらむずむずしてきた」

奥様もそうだったんだ。仕事と趣味以外はほとんどずばらで、掃除は僕の担当だった。まさかお城のような大きなお屋敷を一人で掃

除することになるとは思わなかったけど、もう引き下がれない。

僕は鼻息荒く覚悟を決めて二階へと上がった。

一つ一つ扉を開けて空気の入れ換えだ。

あとでご主人様に叱られたら、逆に怒ってやらなくちゃ！

——結局、掃除は夜になっても終わらなかった。

ひとまずご主人様の部屋らしき所と、玄関をきれいに片付けた。
空気の入れ換えもしたから、きつと気持ちよく眠っていただけはずだ。

掃除は途中で切り上げて夕食の支度に取りかかったけど、食材が
乏しくて質素な野菜スープとパンしか作れなかった。僕にとっては
すごく残念なことだ。

こう見えても、いろんな国を旅してきた僕は、その土地土地の料
理が作れるんだ。許可もなく上がり込んだ僕を怒ったとしても、料
理を一口食べてもらえば、きっと気に入ってくれると思ったのに。

それにしてもお屋敷は静かだった。

時折物音がするのは気のせいかな？ 音のしたほうへ行ってみた
けれど、部屋には鍵が掛かっていて中を確かめることは出来なかつ

た。

幽霊？　なんて考えて背筋がぞくぞくしちゃったけど、僕の前に出てこないってことは害がないってことだね！　きつと、そうだよ！

でも幽霊じゃなくって、もしかしてご主人様だったら？

人前に出るのが嫌いな、ちょっと内気なタイプのご主人様だったら？　僕がバタバタと物音を立てていることに気付いて、出るに出不れなかったのかも。

「ご主人様いらっしゃいますか？」

ノックをしたけれど返事は無くて、僕はまたキッチンに戻った。丸椅子に腰掛けて、ご主人様の登場をじっと待つ。

ご主人様はきつと外出中なんだ。お仕事かな？　旅行だったら困るなあ。正式採用されたわけじゃないから、勝手にベッドを借りるわけにもいかないし。

……今日、どこで寝よう。

数日寝泊まりしていた家に戻るのは気が引けた。せっかく働き口を紹介してくれたのに、また戻ってきたなんて知ったらがっかりしちゃうよね。

次にお会いするときは、いいお返事が出来るようにって祈ってこへ来たんだ。心配させるわけにはいかない。帰るわけにはいかないよ。

ランプの明かりをぼんやり見ていると、うつらうつらしてきた。

今日は一日じゅう大掃除だったし、疲れていて当然だ。テーブルに手をつけて目蓋を閉じたそのとき、遠くで蹄の音がした気がして、ぼんやり気味の意識が少しだけ覚醒した。

それは勘違いじゃなかった。徐々に近付いてくる車輪の音に僕は立ち上がり、硝子窓の向こうを見るが木々に隠れて外は見えない。

きつとご主人様だ！

きつとそうだよ！

逸る気持ちで廊下に飛び出すと、箱馬車は玄関の前で停止した。間もなくして黒マントの男たちが下りて来ると、中から白い外套を着た男性を引き摺り出してきた。

まさか死体？　ぎよつとした僕は、男性の胸像の台座の陰に隠れて、じつと様子を窺った。

「おい、気をつけろっ」

「わかってる」

二人の黒マントの男たちは、ぐったりとして動かない白コートの男性を玄関ホールの長椅子に横たえたと、ランプテーブルに籐の籠を一つ置いていった。

「風邪、引かないのか？」

「いっつも、ああだよ。俺たちが寝室に入るわけにもいかないだろう？」

「そうだが……」

一人は心配気味に何度も振り返ったが、もう一人は「いくぞ」とせっついて、さっさと馬車に乗り込んだ。馬車はすぐに動き出して屋敷を出て行った。

——一方、僕は。

玄関ホールに残された男性と、閉じたばかりの玄関扉を交互に見たあと、覚悟を決めて恐る恐る近付いた。一人の男が「いっつもああだよ」と言っていたから死人ではないと思う。

近く来ると、かすかに寝息が聞こえて僕は安堵した。よかった。男の人は眠っているだけだ。長椅子から半分落ちかけながら、うつぶせでいるのに起きる気配が無い。

「あの……」

ご主人様、でしょうか？

「あのう、こんなところで寝ていたら風邪を引きますよ？」

失礼を承知で肩を揺さぶったが、呻きもしなかった。凄い。完全に爆睡だ。

心配が呆れに変わって僕は肩の力を抜いていた。緊張がほぐれて

くると、自然と男の人の長い髪に目が入った。

黒と白が交ざった髪はきれいに斑になっていて、まるで毛皮のようだ。そういえば前に下宿させてもらった家でも、赤と茶色の斑の髪をした人を見た。昨日までご厄介になっていた人は、まだ若いのに艶やかな白髪だった。

この人も——ご主人様かもしれないこの人も、黒と白が美しく混ざり合い、紋様のようだ。触ってみたい衝動に駆られたけど、我慢我慢。

でも良かった。これで空き家じゃないことは証明されたわけだ。この人が明日起きるまではいさせてもらおう。

とりあえず。

この人がご主人様かもしれないという予測で、寝室へ連れて行く！ 見るからに上等な外套を身につけているし、運んで来た馬車も御貴族様が乗るような立派なものだった。ご主人様じゃなくても、身分が高い人であることは間違いない。

とにかくこのまま寒寒い玄関ホールに眠らせておくわけにはいかないから、僕は覚悟を決めて、男の人の腕を取り背負った。

「ぐっ……！」

重い！

すっごく重たい！

力仕事が不得意な僕が、爆睡で脱力した男の人を背負うなんて暴挙だ。奥様が酒場で酔いつぶれてホテルに運んだときだって、絶体絶命だと思ったのに。

僕の肩を枕代わりに熟睡している人は、横目で見たかぎり若かった。多分三十歳前の人だ。予想していたより若くて少し驚いたけど、今は階段を無事に上りきれるかどうかのほうが、僕にとっては大きな問題だ。

手摺にしがみつinaながら、ぜえぜえはああと一段一段上る僕の背は、そんなに高くない。眠る人は僕よりもずっと背が高いらしくて、膝から下がずると引きずられているのに、何も感じないのだろうか？

「か、階段から落ちてても……気付かなかったりして」
ははは……。

「気づかない、かも」

冗談のつもりが少し本気に思えてきたよ。

冗談はそこまで。なんとか二階まで登り切った僕は、その場で倒れそうになった。けれどここで止まったら、寝室までが尚更遠くなる。ここは一気に行くしかない。

渴いた喉で唾を飲み込み、奥の寝室へとまっすぐに向かった。廊下の明かりを用意していなかったせいで、頼りは月明かりだけだ。月明かりがあるだけマシだね。考えようだ。

息も絶え絶えになりながら、僕は寢室の扉をついに開いた。さあ、ゴールは目の前だ。

あとはベッドの上に倒して、毛布を掛けるだけさ。

ぜえはあ、ぜえはあ、非力な僕はくらくらしながら毛布をはぐり、青年を寝かせようとした。

だけど、そのとき――

「わっ」

はぐった毛布に足がからまって、僕はベッドにうつぶせで倒れていた。

「ちょっ……！」

背負っていた青年の身体が重しになって、僕の身体はベッドに深く沈み込む。

「起きてくださーいっ」

僕はもがきながら叫んだ。けれど青年はぴくりともしない。

「起きてくださーい！　お願いしますー！」

階段で散々臍をぶつけても起きなかった人が、この程度で起きるはずもない。

[illegible]

焦る僕の背後で、青年は穏やかな寝息を立てていた。

2・はじめまして、ご主人様

パンの香りに導かれて、レーヴィ・エルヴァステイが目覚めると、なぜか目の前に良く焼けたパンがあった。

「パン……？」

強い眠気が一気に引いて、レーヴィはパンを凝視した。それが茶色の髪だということによりやく気付いて、ああ……と気だるく得心した。

ん？

髪？

新たな疑問が浮上して、レーヴィは弾むように半身を起こしていた。

パンかと思えば、茶色の髪で、よく見れば、二十歳にも満たないうら若い青年ではないか。丸眼鏡の幼顔の青年が眠っていた。

もしかすると今の今まで、自分はこの青年を下敷きにして眠っていたのだろうか？ もしそうなら、この青年は何者だろうか？

レーヴィは頭を掻いた。状況を把握すると、じわりじわりと困惑がやってくる。

昨日は仕事場から迎えの馬車が来て、そのまま出勤した。食事も休憩も職場で取ったから外出していないし、飲みにも行っていない。

いつも寝入ったレーヴィを、部下が馬車で運んでくれる手はずになっていた。最近は寢室へ行くのも億劫になって、ホールの長椅子に寝かせておいてくれればいいと伝えてあったが、今日は珍しく寢室のベッドの上だ。

しかし部下が連れてきたとは思えないし、階段を上った記憶はない。ということは、こいつが？ まさか。

「……こいつは、誰だ？」

わからない。

レーヴィは数時間前の記憶を辿るように、青年のあどけない寝顔を凝視した。

幼さが色濃く残るその顔は、うつすらとそばかすが描かれていて、まるで白パンに白ゴマを振りかけたようだし、ちんまりとした鼻のせいか、丸眼鏡が大きくずれていた。

子供の落書きのようなユーモラスな表情が、なんだか美味そうだと思ったレーヴィは、はたと我に返った。

今、一瞬だけ妙なことを思った。

なんだか、美味そうだ。——と思った。

なんだか美味そうだ？

「な……っ」

言葉の意味を漸く理解したレーヴィは、頬を熱くしていた。

自分の予期せぬ反応に気付いたレーヴィは、激しく戸惑いながら、ベッドの端まで後ずさる。

危つく床に転げ落ちそうになって、注意深く引腰になりながらベッドを下りると、じりじりと後ずさりつつ様々なことを考えた。

ベッドの上で寝ていたということはつまり、この青年とともに寝室まで来たということだろうか？ だとしたら記憶が無い間に丸眼鏡の青年と出会い、意気投合して……。

意気投合して、つまり。

——つまり、

「まさか！」

頬がぶわつと熱くなり、レーヴィはこれでもかと頭を振っていた。

「知らん！」

レーヴィは白と黒の長い髪を大きく波打たせながら、部屋の隅まで大きく後退する。

「知らんぞ……！ はじめて見る顔だ！」

昨日は一滴も飲んでいないし、飲む予定もなかった。誰かに誘われた覚えもなければ、夜道で拾った覚えもない。第一、レーヴィは仕事中に眠ってしまったはずだ。

仕事中？

はっと我に返ったレーヴィは、自分が制服を着ていることに気付いて胸を押さえていた。そのまま眠ってしまったせいか上着もズボンも外套までもがしわくちゃだが、脱いだ形跡は見られない。

呑気に眠る青年も丸眼鏡こそずれているか、生成りのシャツも焦げ茶色のベストもズボンも、どれも貧乏そうな衣服だが着込んだままだ。

そのことによつやく気付いたレーヴィは、どっと大きく息を吐いて髪をかき上げた。

「脅かせやがつて……」

可愛い顔して、朝から焦らせてくれる。

「か……っ」

か・わ・い・い・か・お——だと？

瞬時に浮かんだ言葉に、レーヴィは激しく動揺して目を見開いた。

「冗談でもそんなことを考えてしまった自分が怖い。怖くて寒い。寒くて寒くて、すこぶる恐ろしい。このまま青年を見ていたら、頭が馬鹿になってしまいそうだ。いいや、事実なりかけている。」

「じ、冗談じゃないぞ……この私が」

この国で最も尊ばれる一級魔導師であるレーヴィが、間抜け面で寝こけている若蔵に惑わされるはずがないのだ。

落ち着け。落ち着けと、二度、三度と大きく深呼吸したレーヴィは、香ばしいパンの匂いをさせている青年を睨み付けると、寝室を後にした。

心なしに早歩きになってしまったのは、今すぐ風呂に入りたいという気持ちが急かすだけで、寝室から逃げたわけではない。朝風呂はレーヴィの日課であり、決して怖くなつたわけではないのだ。断じて違う。

途中、ワインセラーから上物を一本引き出したレーヴィは、その場で栓を開けると盛大にラッパ飲みをしていた。瓶の半分まで一気に飲んだあとでもう一本瓶を持つと、大股で浴室へと歩き出した。

* * *

扉が閉まるような物音をきっかけに、僕が目蓋がふわりと開いていた。

今、多分——音がした。扉の閉まる音だ。

確かめたいけれど、まだ少し眠っていたい。

真っ白なシーツに描かれた皺をぼんやり見ながら、気持ちのいい眠気に少しの時間微睡んでいると、ぼわくつと一つの疑問が浮かんできた。

「……ここ……どこだっけ？」

ぼつりと呟いたあとで大きく伸びをした僕は、ベッドの大きさに少し驚いていた。だって両手足を大の字で思いつきり伸ばしても、壁にも柱にもぶつからないんだ。

四本の支柱に支えられた天蓋の屋根には、花と月と星が描かれていて、なんともロマンティック。こんなところで眠れるなんて幸せだよなあ。

ん？

でも、なんで？

新たな疑問に気付いたのを合図に、僕は無理矢理眠気を追い払う。

とても重大なことを忘れていた気がする。なんだろう？

それにしても大きなベッドだなあ。

どうして僕はこんなところで眠っているの？

「ん？」

声に出すと同時に、答えがすっと落ちてきた。

「あのまま寝ちゃったんだ！」

ご主人様！

そうだ、そうだった！

ご主人様——かもしれない人はどこにいるの！？

僕は飛び起きた勢いでベッドから転げ落ちると、ベッドの角で身を隠すようにしながら寝室をぐるりと見渡した。

僕が落ちるなり、緑と金系の天蓋布がふわりと波打って視界を邪魔する。邪魔だよ、邪魔！ 冷や汗をかきながら天蓋布を除けて、広い寝室を見渡したけど、ご主人様……らしき人はどこにも見当たらない。

「……あれ？」

ずれた眼鏡を直しながら、僕は肩の力を抜いていた。

僕は昨日、馬車で運ばれて来た青年を一人、息も絶え絶えになりながらこの寝室へと連れてきたはずだ。寝かせるつもりが、うつかり下敷きになってしまい、それっきり。

いつの間にか眠ってしまったのは大失敗だけど、でもなぜ？

どうして誰もいないの？

「えつと……夢？」

まさか、それははない。

だって眠気で力尽きるまで、僕はベッドの上でもがきにもがいたんだから。その証拠にほら、きれいに整えたはずの毛布がめちゃくちゃだよ。背中もじんわり痛いし、全然疲れが取れてないもの。

だつたらなぜ？

もしあの青年がご主人様なら、見知らぬ人間を寝室に放っておくだろうか？ そもそも目覚めていきなり赤の他人が目の前にいたら、激しく驚くだろう？

だつたらなぜ？

「ああ！ ぐるぐる考えている暇があったら、ご主人様を探さない
とっ」

朝食の準備もまだだし、ご挨拶もまだだ！

うわっ、ぼんやりなんかしてられない。僕が慌てて立ち上がったそのとき、寝室の扉がノックも開いて金髪の男性が現れた。

「！」

昨日見た人とは違うその姿に、僕の思考は一瞬だけ停止していた。背の高い人だった。

多分、昨日の人よりも高いし、タイトな黒いパンツの足もすっごく長い。波打つ金の髪は眩いほどで、瞳は碧く透けるようだ。おもわず見とれていると、目尻の垂れた双眸がすっと細められる。

「何者だ？」

「……！」

威圧的な声に緊張した僕は直立していた。

広い双肩に逞しい体付きの青年は、僕を値踏みするように頭の先から足先まで繰り返し見ては、腕を組み高圧的に見下ろした。

「何者だっ て聞いてんだ」

「あ のっ、僕は！」

情け無いことに声が裏返ってしまい、僕は真っ赤になっていた。

そうだよ。見知らぬ小男がこんなところにいたら、やさしいご主人様だって当然不機嫌になるよね。顔つきが怖くなっただって当然だ。僕は大きく息を吸い込んで、とにかくにも気持ちを落ち着かせる。

「タウトさんの紹介で参りました、リオ・アーンと申します!」

深々と頭を下げたあとで、紹介状を思い出した。

「紹介状です!」

すっかりよれよれになってしまったけど、シャツのポケットに紹介状を入れておいて良かった。

金の髪を後ろに緩く結んだ青年は、「タウト」と呟きながら、紹介状を受け取ると封を開けた。

「使用人の仕事は慣れています。掃除も料理も得意です。庭仕事も少しは覚えがあります。どうか僕をお雇いください」

「少し黙ってろ」

「は、はい……」

「ご主人様は不機嫌だ。」

最悪の第一印象。でも当然だよなあ。話を聞く前に追い出されただけマシって思わなくっちゃ。

黙って読みはじめたご主人様は、白いシャツの襟を大きくはだけさせて、厚い胸板を強調させていた。プレーボーイ……というより、ドンファンという言葉が似合いそうな雰囲気かな。

垂れた眦とか、ついと上がった口の端とか、お酒と女性が好きそうな感じた。使用人に優しいといいんだけど。そつと品定めしていると、ご主人様は紹介状を閉じて鼻先に突き出した。

「あの……」

どうでしょう。

「タウト様なら安心だ」

「！ では雇っていただけるのですか？」

ぱつと顔色を明るくした僕に対して、ご主人様はすばらしく素っ気なくて、背中を向けるなり扉に向けて歩き出した。

「ご主人様？ 僕は……あのっ」

「俺はご主人様じゃねえ」

「違うのですか！？」

おもわず声が裏返る。

「直接本人に言いな」

「では、どこにご主人様はいらっしゃるのですか？」

戸惑う僕に向けて、青い眼のドンファンは指差した。

「浴室を見て来い」

「浴室、ですか？」

「さっさと行け」

「は、はいっ」

なにがなにやらだ！

今の人がご主人様じゃないのなら、一体誰がご主人様だというの
だろう？ だけどとても聞けるような雰囲気ではなくて、その場か
ら逃げるよう寝室を飛び出した僕は、浴室へと走る。

浴室はすぐそこだ。

「失礼します！」

乱暴にノックして金のドアノブを開くと、もわりと湿気が僕を出
迎えた。

ぶわつと眼鏡が曇ってしまい、慌ててベストの裾で拭いた僕は、
眼鏡を掛けるなりぎよつとなる。

浴室にいたのはなんと、昨夜のあの人ではないか。

しかもワイン瓶片手に、浴槽に沈んでいる！

「ちよっ！」

ワインを飲み過ぎたのか、全身真っ赤になってぐったりしている姿に、僕は仰天していた。ああ、なんてだらしない人なんだろう！

「おっ、起きてくださーい！」

昨日の夜と同じ言葉を叫んだ僕は、熟睡している白黒斑髪 of 男性からワイン瓶を奪い、両脇に手を突き引き摺り出すように持ちあげる。

「う……！」

重い！

すっごく重たいっ！

でもその前に――。

「丸見えですっ、ご主人様……っ」

お風呂に入っているのだから当たり前だけど、叫ばずにはいられなかった。

3・あの男は何者だ！

十分理解しているつもりだけど、爆睡して弛緩した身体はすごく重い。

「起きてください！ このままじゃのぼせますよお！」

浴槽から引き上げようと四苦八苦しながら訴えるけど、全裸の青年の耳には入っていないのか、案の定ぴくりともしないんだ。

床に転がっていたワインの瓶は空っぽだし、手に持っていた二本目の瓶は半分以上が無くなっていたから、かなり飲んでいると思う。

僕がうんうん言いながら引き上げようとしている身体は、ほんのり赤く染まっているし、葡萄の芳醇な香りが浴室いっぱいに満ちているから、呼吸するだけで酔いそうだ。

「飲みながらお風呂入るなんて、逆上せるために入っているようなものだよ！ 起きてください！ 溺れたいんですか？」

なんて必死に言ったところで聞こえるはずがない。

僕はこの二日でこの人の眠りの深さを十分学んだけど、だからって放って置いたら風邪をひくかもしれないし、溺れるかもしれないし、悪い可能性しか浮かんでこない。

「寝てたか？」

天の助けだった。

「寝てました！」

「やっぱりな」

あの金髪の人がやってきて、大きくため息を吐く。

「一度寝ると起きないんだ。お前は足を持って、俺が上半身を持つから」

「はい！」

つと、その前にタオル、タオル！

腰にタオルを巻き付けたあとで僕は足を持った。

せーの！ という掛け声を合図に、青年を浴槽から引き上げた僕たちは、廊下をびしょびしょに濡らしながら寝室に運んでいく。それにしても本当に凄いよ。だって、ちつとも起きる気配が無いんだ。

「いつもこんな感じなんですか？」

「ああ、まあな」

「あの、まだお名前をお伺いしていないのですが、」

「扉開けるぞ」

「はいっ」

話の途中で扉を開けた金髪の青年は、爆睡中の青年をベッドへと運ぶと、シャツの乱れた襟を直した。

「濡れタオルと、お水持って来ます」

僕はそう言い残してキッチンへと走った。

水桶とタオル、そしてポットを置いたトレイを持って戻ると、あの金髪の青年の姿はどこにもなかった。まさか逆上せたままの人を置き去りに、どこかへ行ってしまったってこと!?

「使用人って感じの人じゃなかったけど、だからって……っ」

僕が一人で着替えさせなくちゃダメってことだね！ ロープはっ、えっと、ロープはクローゼットの中だっけ？ いやいや、浴室にあった藤のチェストかもしれない！

「あつたっ」

予想は当たっていた。シルク地の上質なガウンを準備した僕は、まだご主人様かどうかわからない人に、四苦八苦しながら着替えさせる。

半身を起こした途端に頭がぐんと前に倒れたと思えば、袖に腕を通してある間に、後ろにがっ倒れて、とにかくぐらぐらと外れそうなくらい揺れているのに、呻き声の一つも立てない。

頭が左右に波打つと、白と黒の髪が僕の鼻をくすぐって、うつかりするとくしゃみが出そうだ。

やっとの思いでローブを着せ終えた僕は、全身びっしりな上に疲労でぐったりだった。どうにかこうにかご主人様（かもしれない人）をベッドに横たえると、大仕事の完了に安堵の息が出ていた。

「っ……疲れた」

呟いたそのとき、黒い睫毛が突然大きく見開かれて、銀の瞳とがち合った。

「う・わ……ッ」

驚きの声を上げたのは僕ではなくて、なぜか熟睡していた青年のほうだ。目を丸くしながら僕の胸を突き飛ばした青年は、バネのように勢いよく起きあがると、こちらを指差した。

「何者だ！」

その怒声を前に、疲労困憊していた僕はちよつとだけショックを受けていた。だっていきなり指差して、「何者だって」それはないよ。

風邪を心配して二階の寝室まで必死に運んでいったのも、びしょ濡れになりながら浴室から運んで来たのも、所詮は僕のお節介かもしれないけど、だからって。

だからって。

ダメだ、ダメだ。主人に対価を求めてしまうなんて、僕もまだまだ使用人として未熟な証拠だよ。でも理性とは裏腹に涙がじわりと滲んできて、ぐっと下唇を噛み締める。

そんな情け無い僕の表情に気付いたのか、白と黒の斑の不思議な髪をした青年は、細い眉を困惑気味にひそめていた。そしてまた銀色の瞳を小さく見開いたあとで、へたり気味になっていた指先に緊張感を籠めた。

「何者だと聞いているのだっ。答える！」

「僕はタウトさんの紹介で来た、リオ・アーロンと言います！」

僕はちよつとだけ怒鳴り声で返した。

「なに？」

「タウトさんの紹介ですっ。これ、紹介状……あっ！ びしょびしょになってるっ」

高慢な口調に萎縮した僕は慌てて胸ポケットの封筒を出したけど、さっきの一騒動が原因でびしょ濡れだ。インクも滲んでいるし、読めるかどうか怪しい。

「さきほど別の方に浴室を見て来いと言われて、のぞいたのです。そしたらあなた様が湯船のなかで眠っておられて、その方と一緒にここまでお運びしたんです。そ、そのときに封筒が濡れてしまったみたいです」

ど、ど、ど、どうしよう！

「よこせっ」

青年は僕の手から引ったくするように封筒を奪い、指先で紙の端をつまみながら、ゆっくりと封筒から手紙を取り出した。青インクが盛大に滲んだ紙面を凝視したあとで、青年は忌々しげに舌打ちした。

「さっきなんと言った」

「え？」

「さっきだ」

「さっきって……」

銀色の寒寒しい視線が、紙面から僕へと矛先を変えてズブツと突き刺した。気持ちいが串刺しにされたような感覚に、僕の肩は反射的にびくりと跳ねる。

男性的でエネルギーシユな雰囲気をした金色の髪の男性とは違い、この人は鋭いまでに知性的で、涼しいというより凍えそうなほど整った顔立ちだ。

愛嬌というものを全身から刮げ落としたような無愛想っぷりに、僕の身体は心なしか震えてる。そもそも黒と白の斑の髪も、銀の髪も、そして雪のような白い肌にも「優しさ」の片鱗が無いではないか。

怖い！

奥様！ 僕はくじけてしまいそうです！

「ここにはよく喋る青年だと書いてあるが嘘か？」

「えっ……いえっ、多分」

話し好きだと思います。でもそれは人によりけりです。

「多分、嘘ということか？」

「いえ、違います！ き……緊張しています」

「お前の状態などどうだっていい。さきほどの話だ。『別の方』とはなんだ」

「別の方は、別の方です。お名前を窺う前にいなくなってしまったのですが、金色の長い髪が波打っている男性でした」

「金の髪——？」

青年は呟いたあとで滴の滴る髪をかき上げた。

「波打つ長い髪」

いぶかしむように、薄い唇をへの字にしながら青年がベッドを下りた。そして床に落ちていたガウンの腰紐を拾い、しっかりと結わ

える。

「あなた様のことを良く知っていらっしやるようでした。ご主人様かとお伺いしたら、違うと言われました」

「この屋敷の主は私だ」

「ご、ご主人様!？」

僕は思わず素っ頓狂な声を上げていた。

「レーヴィ・エルヴァステイ様ですか!」

「——他に誰がいるというのだ」

「申し訳ありません! 今までの非礼をお許してください!」

冷たい返事に僕は鳥肌を立てながら、深々と頭を下げた。

女好きと冷酷のどちらがいいかと聞かれたら、前者のほうがにぎやかで楽しそうだなとか、ちらりと思ってしまうた僕は反省に値する!

「ご主人様、どうぞ僕をお雇いください!」

「うるさい。考え中だ」

「は、はいっ」

考え中!

僕を雇つか考え中なんだ。どきどきして落ち着かない。

この人が、新しいご主人様。レーヴィ・エルヴァステイ様だ。

金髪の人ほど背は高くないけれど、教養と知慮を兼ね備えた見目麗しい人だった。すつと通った細い鼻筋が芸術的に美しくて、大人の女性が放っておかない雰囲気だ。

その口調も鉄壁の自信と理屈によって構築されているようで、僕は自然と引腰になっていた。

実を言えば、こういう人はちよつと苦手なんだ。

見るからに無駄口を許さない感じだし、毎日お説教されそうだよ。一日中家の中が静まり返って、笑い声なんて皆無。

あの優しいタウトさんが薦めてくれた人だから、期待していたんだけどなあ。これじゃあ毎日びくびくしながら仕事しなくちゃいけないかも。

——つて、ああ、ダメだ！

勝手な想像で好き嫌いを決めたら、わかることもわからなくなるよ！ タウトさんが薦めてくれた人だもの、きつといい人だよ！

きつと、きつと、ステキな人だよ！

「おい」

ヒッ！

「は、はい！」

「名前は？」

「リオ・アーンです」

気持ち切り替えたその瞬間に尊大な声がして、僕は竦みながら返事していた。ご主人様は不機嫌そうに横目で僕を見ながら、推薦状をガウンのポケットにしまう。

「あの……僕は雇っていただけのんでしょうか？」

「雇うも何も、師の提案を断ることは出来ん」

「お雇いくださるのですか！」

うわあああ……！僕は嬉しくて飛び上がった。

「ありがとうございます！一生懸命がんばります！」

「……礼ならば師に言え」

「タウトさんにも必ず言いますっ。あの、タウトさんは、ご主人様のお師匠さまなのですか？」

習い事の先生か何かかな？ 僕が尋ねると、ご主人様は白い眉相に深い深い皺を刻んで、僕を長い時間凝視した。そのあまりの冷徹な視線に、萎縮しっぱなしの僕はおもわず後ずさる。

「異国人か？」

「は、はい。三ヶ月前にこの国へ来ました。以前も小間使いの仕事をしていましたから、料理と掃除は得意です。あと、庭仕事も少しだけ覚えがあります！——でもなぜ僕が異国人だとわかったのですか？」

タウトさんの手紙に書いてあったのかな？ 思い切って尋ねたけれど、ご主人様は返答しないまま扉へと歩き出した。

「ご主人様、どちらへ！」

「金髪の男を捜す」

「え？ ご主人様のお知り合いではないのですか？」

「知らん！」

鋭い怒声に、僕はその場で猫のようにびくりと弾んでいた。

「この屋敷には私独りしかいない！」

「！ では一体………！」

「金色の波打つ長い髪をした男だと言ったな。背はどれくらいだ」

「ご主人様よりも少し高くて、肩幅が広くって、白いシャツに黒いパンツを履いていました。ご主人様のことを知っていらつしやいましたし、タウトさんも信頼出来るとおっしゃっていました。悪い人ではないと思います！」

「悪人が善人かどうかは問題外だ。なぜ私の屋敷に無断で入ったか、入れたかが問題だ。――捕縛して突き止める」

「ご主人様を浴室から運んだのは、僕とその方なんですよ！？ 悪い人ならそんなことしませんっ」

ぞくとするような慍色に、^{つんしゅく} つつい僕は金色の髪の人擁護に廻ってしまっていた。でもだって、あの人がいなかったら今頃ご主人様はどうなっていたかわからないんだ。

懸命に訴える僕を置いて、旦那様はクローゼットから純白の襟付きシャツと、オリーブグリーンと焦げ茶色の格子模様のスラックスを出して、さっさと着替えはじめた。

「着替えの準備なら僕がしましたのにつ」

慌てて靴箱から黒い皮靴を出すと、ご主人様は切れ長の目を細めて焦げ茶色の靴を出す。

う！

お気に召さなかったことに僕の胸はつきんと痛んだ。

「それは夜会用だ。使うことはないから、奥にしまっておけ」

「は、はい……っ」

言われた通りに奥へと突っ込んだ僕は、さっさと前に行くご主人様の後を駆け足で追い掛けた。

「邪魔だ。食事の支度でもしている」

「でも……いえ、僕もお供させてください!」

「足手まといだと言っているのがわからないのか」

「でも……っ」

一瞬だけ躊躇った僕に、ご主人様の返事は辛辣だ。だけど僕は引き下がらない。

「ご主人様を一人で行かせるわけにはいきません! 僕も一緒に行かせてください!」

廊下の隅の用具室から蜘蛛の巣だらけのモップを持って来た僕に、ご主人様は眉をひそめて呆れ顔だ。

「なんと言おうと付いて行きます!」

ご主人様は苦手なタイプだけど、僕を雇ってくれるというからには、正当なご主人様だ。

金色の髪の人の子体は不明だけど、やっぱり悪い人とは思えない。でもこの冷たそうなご主人様と二人きりになったら、善人だって怒

り出しちゃうかも。

ここは穩便に解決させるためにも、僕が付いていかなくちゃ！

僕の訴える眼差しに折れたのか、急に視線を逸らして前を歩き出した。

「待つてください、ご主人様！」

慌てて追い掛ける僕に、ご主人様はとっても冷たい。

お城のような広いお屋敷に、一人きりで暮らすご主人様。

僕は今日からそんな変わった人にお仕えするわけだけど、無事にやって行けるかな……？

ああ、ダメダメ！

もつと明るいことを考えなくっちゃ！ その先に楽しいことが待っているかもしれないよ！

怖じ気づいていたら何もはじまらない！

でも——白状すると、うきつき感はどうに消え失せて、困惑にも似た不安ばかりがぐるぐると頭をめぐっていた。

4・リオとご主人様の屋敷探索

金の髪の男を捜すべく、屋敷搜索がはじまった！

モップの柄を握り締める僕と、気難しそうなご主人様はひとまず二階の部屋を一つ一つ開けていくことにした。けれどお城と言っても過言ではないほどの大きなお屋敷だから、部屋を一つ一つ見てまわるだけでも、かなりの時間がかかる。

昨日はお屋敷に到着するなり掃除に明け暮れていた僕は、ある程度覚悟していたけれど、せっかくのお休みをふいにされたと言いたご主人様は、刻々と御機嫌斜めになっていく。

——しかも。

「この部屋は昨日掃除したのか？」

「いえ。昨日は玄関ホールとご主人様の寝室と、それからキッチン
を少しだけです」

怒りを含んだ低い声に、僕は萎縮しながら返事した。

「ご主人様がお使いになられたのではないのですか？」

「私ではない」

どの部屋も埃と蜘蛛の巣だらけだというのに、ビリヤードルーム 撞球室だけは妙に小綺麗だった。しかもほんのりと煙草の香りがして、暖炉の上に置かれたティーソーサーに煙草の吸い殻が一本置いてあった。

「誰が煙草なんか。部屋に臭いがつくではないか！ しかもワインまで！」

「ご主人様はわなわなと震えながら、ビリヤード台に置き去りにされたままのワインボトルを指差した。」

「……まだ開けられて新しいみたいですな」

埃が見当たらないところを見ると、間違いなく最近この部屋を使った者がいるようだ。

——それにくわえて。

一階へ下りると、今度は鍵のかかる部屋が幾つもあった。

「鍵などつけた覚えはないぞ！」

「以前の使用人ではないのですか？」

「使用人など雇ったことはない」

力任せにドアノブを捻りながら、ご主人様は怒りに肩を震わせていた。

鍵がかかっている部屋は知っていたけれど、ご主人様が設置していないと言う以上、開ける術は無い。これは妙な話だ。

「昨日ご主人様の帰りを一人で待っていたとき、時折物音がしたのですが……それはもしかしてあの人だったのでしょうか？」

「知らんつ。食事は仕事場でしていたし、家には風呂と寝に帰るよ
うなものだ。この屋敷はもともとエルヴァステイ家のものであつて、
買い取ったわけではないし、誰かを住ませたことなど一度も無い
！」

「ですが金髪の男性はいたんですよ？ 僕一人では熟睡するご主人
様を浴室から運ぶなんてことは、絶対に出来ませんし」

見てください、この非力な腕を！

料理と掃除は得意でも、力仕事は本当に苦手なんだ。そういうこ
とだけは奥様がやってくれたし。自信満々の力瘤は、「こぶ」があ
るかどうかもちょっと怪しい。

「そんなことで嘘はつきません！」

「お前が嘘を吐いているなどと思つてはいない」

力説する僕から視線を逸らしながら、ご主人様は素っ気なく返事
した。僕は予想しなかった言葉に急に嬉しくなっていた。

「僕の言葉を信じてくださるんですね！ ご主人様、ありがとうご
ざいます！」

「——別に……っ」

「ご主人様は驚いたように半歩身を引いた。

「こんなことで嘘を吐いてなんになるというのだ、馬鹿でもわかる」

「でも嬉しいです！」

愛想の欠片も無い言葉だったけど、初対面なのにそんなふうにつけてもらえるなんて幸せ者だにっこり笑う僕に、ご主人様は眉を上げ、急に不機嫌な顔だ。途端に歩く足を速くしだす。

「待ってください！、僕も行きます」

僕は慌てて追い掛けた。

「窓を割られた形跡は無いな」

「はい！ 昨日、部屋の換気をしたかぎりでは、窓硝子は無事でした」

と、そのとき奥の部屋で物音が聞こえた気がして、僕とご主人様の表情は急に強ばった。無言で視線を交わして、そっと耳を澄ませると、何かが擦れるような音がする。

「音がします！ 音が！」

興奮するあまりに、僕はご主人様の腕にしがみついていた。途端にご主人様が端正な顔を強張らせる。

「わ！」

気難しそうな人になんてことを！ 我に返った僕は跳ねるように後ずさり真っ赤になった。

「すみませんっ！ つい！」

「っ、ついではない！ 驚かせるなっ」

口早に怒鳴ったご主人様が、ドアノブを激しく捻った。

「ここもかつ。クソッ！」

扉を拳で叩いてご主人様が悪態を吐く。すると扉の向こうで、今はつきりと足音が聞こえた。

「誰かいます！」

僕は眼を見開いて扉を叩く。

「どうして逃げるんですか！？ 出て来てください！ 話し合いましょっ！」

言い終える前に室内から扉の閉まる音がして、隣の部屋へと移動してしまった。僕たちも慌ただしく追いかけるけれど、足音を聞き逃してしまった。――鍵は、

「ここもか！」

部屋はどこもかしこも開かずの間だらけだ。

「人が気付かないからと、いい気になって……………」

ご主人様は憎々しげに舌打ちして、怒りの息を静かに吐いた。

「主の私の許可もなく屋敷に入るとは、ふんっ……いい度胸ではないか」

拳を何度も壁に打ち付けるご主人様は、怒気で眼を充血させていた。

このまま搜索が長引いたら、話し合いどころの騒ぎじゃ無くなってしまう。事実もうご主人様の沸点は限界を超えているはずだ。

「旦那様、警察を呼びましょう。あと鍵屋さんも。僕が今から走って呼んで参ります！」

「お前はそこにいろっ」

「！」

身の竦むような鋭い声に、僕はモップを抱きしめた。

ご主人様は怒らせると怖い人だ。僕はこれから真面目に、すつごく真面目に働こう！　そう心に誓って、早くご主人様のお怒りが収まることをただただ祈る。

ご主人様はふいに靴音を鳴らして歩き出した。足音がした方向と

は逆に進むご主人様の行動が理解出来ずに、僕は小走りになって追いつける。

「ご主人様、どこへ！」

返事は無く、黒と白の斑の髪が大きく揺れるだけだ。

ずっと伸びた背筋がきれいで、上品だななんて心の隅で感心していたけど、全身から「激怒」のオーラを放つ様子に、うっとりするどころか引き攣ってしまう。

どこへ行くのかと思いきや、ご主人様は地下へと続く階段を下り、ワインセラーで足を止めた。そして埃だらけの瓶を一本、二本、三本と腕に抱えて、持ちきれなくなると僕に手渡した。

「何をするのですか？」

ワインでも飲みながら彼が出てくるのを待つ……なんて、平和的な様子には見えないし、僕にも一本、二本、三本と持たされて、最終的には五本の瓶が手渡された。

「ついてこい」

「は、はい」

瓶を落とさないように慎重になりながら階段を上り終えると、ご主人様は床に次々と瓶を置いていく。そして僕が抱え持つ瓶も置き終えると、腕に付いた埃を払った。

「このワインをどうされるのですか？」

「ご主人様を囲むように円を描いたワイン瓶を見ながら、僕は小首を傾げる。」

足音がした部屋は屋敷の奥だし、逆走したおかげで随分と距離が離れてる。それだというのに、ご主人様は鋭く奥のほうを睨み付けたまま動かない。

「一体何をする気だろうか？」

「ワインが飲みたいのなら、たっぷり飲ませてやろう」

宴会をするつもりなのかな？ まさか、ここで？

僕が尚も怪訝になったそのとき、ご主人様の左腕が胸の前で一条の線を切った。

シュー——と短く素早い息を吐いたその瞬間、ご主人様を囲むワイン瓶が横に真つ二つに斬れて、窄まった注ぎ口が床に崩れ落ちた。

「あっ！」

器の束縛から解放された赤紫の液体は、芳醇な香りを放ちながら盛大に床にぶちまけられてしまったではないか。

当然ながら僕は驚いた。

だって何がどうなってそうだったのか、まるでわからないんだ。

「こ、これって……！」

これってどういうことですか！

「ご主人様は何も持っていないし、仮にもし剣を持っていたとしたら僕が全力でお止めしたし取り上げたはずだ。だけどご主人様は何も持っていないんだ。」

それならどうしてワイン瓶が割れたの？

「ご主人様、こ、これってなんの手品ですか？」

一瞬の出来事に思考が停止した僕は、盛大に床に広がるワインを踏まないようにつま先立ちになりながら目で訴えた。

けれどご主人様は、割れた——というより斬れた——ワイン瓶のサークルの中で、鋭い眼光のまま今度は奥の部屋へと向けて、素早く動く左の手が宙に何かを描いていく。

呪文？

まさか！

まさかそんなはず。

僕は咄嗟にそう思い、口をぽっかりと開けていた。

目の前のご主人様はシュツという短い吐息のあとで、人差し指と中指の爪先を奥の部屋へと向ける。すると足下にぶちまけられた赤ワインがぶるぶると波打ちはじめ、目にも留まらぬ速度で床を滑っていった。

「ワインが！　ワインが動いてます！」

さながら蛇のように、いいや、それ以上に素早い動きで床を滑っていく赤紫色の液体に、僕は大喜奮で全身鳥肌を立てていた。

「あれはご主人様がしたのですか！？」

ワインを追い掛けるように歩き出したご主人様を追い掛けながら、僕は瞳を輝かせる。

信じられない！　今のはなんだったのだろう！

「ご主人様がやったんですよね！」

ワイン瓶が真つ二つに切れたと思えば、ワインが意志を持つように床を滑っていったんだ。そんなこと手品じゃ無理だよね！　だとしたら、——そう！

「ご主人様は魔法使いなのですか！」

「魔法使いではなく、魔導師だ！」

「マドウシ！？ やっぱり魔法使いなのですね！！」

うわあああ……！！

「僕の新しいご主人様は魔法使い様なのですね！　すごいです！　感動です！」

「だから魔導師だと言っている！」

「さっきの魔法なのですか？　しゅって息を吹いたのも、こ、こうやって二本の指でいろんなふうに動かしたのも、全部全部魔法のためなのですか！」

「うるさいっ、気が散るから後ろへ下がれっ」

「は、はい、ごめんなさい！」

顔を真っ赤にして質問攻めにする僕を、ご主人様が手で払う。心なしか顔が赤くなっているのは照れている証拠かな！

「ご主人様が魔法使い……………！」

後ろに下がり、今見たことをおさらいすると、感動で身体がぶるぶると震えてきた。ど、どうしよう、本物の魔法使いだ！

僕は今、魔法使いと出合っているんだ！

「すごい！　本当にすごい……………！　あっ、待ってくださいっ」

急にご主人様は足早になって、僕は慌てて小走りになった。

こんなことつてあるかしら。今すぐ奥様に自慢したいよ。

だって怪しい仙人とか呪術者は見てきたけれど、目の前であんなにもはつきりと「魔法」を使った人はじめてなんだ。

「いっぱい修行したのですか！ あ！ タウトさんがお師匠様ってことは、タウトさんも魔法使いなのですか？」

まさか！

しばらくおうちに「厄介」になっていたけれど、「魔法」の「ま」の字も見なかったよ。ご主人様がお弟子さんだなんて一言も言っていなかったし、今度お会いしたら確かめなくちゃ。

「あの！ あの！ どんな魔法が使えるのですか？ 空も飛べたりするんですか？」

「黙れ！ 気が散るだろうッ」

ヒッ！

身の竦むような怒声に、浮かれに浮かれていた僕の心は一気に冷えた。そうだった。新しい旦那様は「魔法使い」である前に、気難しい人だった。

僕はまたモップの柄を握り締めて、固く目を瞑る。しばらくしてそろりと目蓋を上げると、ずれた眼鏡の向こうに遠くを歩くご主人様の背中を見た。

「待つてくださーいっ」

ご主人様は、つ……冷たい人です。

でも僕は負けないよ。レーヴィ・エルヴァステイ様を新しい主と決めたからには、僕の大事なご主人様だ。

再び駆け寄った僕を横目に、ご主人様は鍵のかかっていた部屋の前に立つとドアノブを捻った。さきほどまで間違いなく鍵がかかっていたはずなのに、今度はするりと開いた。

「ワインを操って開けたのですか？」

と言う僕の好奇心に満ち溢れた問いかけに対して、冷たすぎる視線を向けたご主人様は、さっさと室内に入ってしまった。

遅れて続くと、そこには――。

「わあ、ヴァイオリン！」

テーブルの上の飴色に輝くヴァイオリンに目が行って、つい声が大きくなっていた僕に、ご主人様の鋭い視線が突き刺さる。

「すみません！ つい大声が出てしまいました！」

「そんなことはどうでもいいつ。あれは誰だ！」

「え……?」

慌てて謝る僕に、ご主人様は前のめりだ。

「金髪の男だと聞いたが、あれは何者だ！」

ご主人様が指差す先には、金髪の精悍な男性ではなく、——なぜか黒髪の男性があぐらをかいていた。

5・謎の男たち

なんと、二人目の謎の男の登場だった。

「私は聞いていないぞっ」

「ぼ、僕もです！ てっきり金髪の人だと思ったのに……！」

目の前にいるのは金髪の男性ではなく、黒髪の男性ですこぶる華奢な体付きの人だった。

顎のラインまでの黒髪が露に濡れたように美しく、顔立ちもほっそりとしているから一見すると知性的な女性のようにだけど、ワインの綱に掴まり観念した顔はけわしくて、僕は咄嗟に「気難しそうな人がまた一人増えた！」なんて思ってしまったほどだ。

「何者だ」

気難しいご主人様が居丈高に見下ろすと、同じく気難しそうな黒髪の人、眉相に深い皺が出来、ぐっと唇を噛み締めた。

「素直に言ったほうがいいですよ！」

白状する気なしって様子に、なぜか僕のほうが慌てていた。

ご主人様は魔法使いなんだ。機嫌を損ねたら魔法で何をされるかわかったものじゃない。だけど焦る僕とはうらはらに、男の人は黙然としている。

「私のワインセラーにも出入りしているようだな。許可もなく勝手に飲んでいるところを見ると、酒がいける口のようだ。そのワインも美味かろう？」

口の端を冷酷に歪めながら、赤く太いワインの縄を指先で撫でる。ぶるんと波打ちながら男の腕にじわりと食い込む様子は、赤い蛇が絞め殺す過程のようだ。

「ご、ご主人様、暴力はおやめください」

「これが暴力に見えるか？」

青ざめながら訴えると、ご主人様が尊大に腕を組んだ。

「よくわかりません。でも男の人の腕にワインが食い込んでいます」

「私の屋敷に許可もなく入り込み、あまつさえワインまで飲むという太々しい連中だ。肝の据わった奴等を讃えて、飽きるまで飲ませてやろうと思っただけだ」

「飲ませるって……でも。——あ！」

お酒って、皮膚からも浸透するんだっけ！

そういえば奥様がワイン入りのお風呂に長時間入って、二日酔いになっていたのを思い出したよ。

「蛇の生殺しみたいな陰険なことやめてください！　まずは話し合いましょー！」

「陰険とはなんだ、失礼だな。この顔をよく見てみる。何があったって喋りはしない覚悟の顔だ」

「なぜですか！」

僕は黒髪 of 男性の前で膝をつく。

「なぜ何も言わないんですか？ 確かにご主人様は怒っていらつしやいますけど、理由次第ではきつとお許しくださると思うんです。黙っていたら余計に誤解を生むだけだとは思いませんか？」

黒髪の方は問いを投げかけた僕を間近で凝視して、ふっと長い睫毛を落とした。諦めにも似た表情に、赤らむ頬が印象的だ。心なしか吐息も浅い。

よく見れば白いシャツがワインのせいで、びっしりと赤く濡れていた。それに負けじと、首筋や鎖骨が紅色をしている。こんなに急速に酔ったら身体に悪いよ。絶対に悪いに決まってる！

「ご主人様っ、この縄を外してください！」

「黙れ。お前も黙っていて構わんぞ。飲み足りないならワインを持つて来よう」

「見損ないましたよっ。なぜそのようなことをおっしゃるんですか！」

「おい。会って間もない私に、お前はなんの期待をかけているつもりだ？ そういうものは迷惑だ！」

気魄負けした僕は言葉に詰まって、ぐっと息を呑む。

でも！

たしかにご主人様とは出合ったばかりだけど、魔法使いであることには変わりないし、あのタウトさんのお弟子さんならきつといい人のはずなんだ。

言葉に出せない気持ちが僕を涙目にさせていた。そんなみつともない僕を見たご主人様は、怖い顔のまま背中を仰け反らせると、いきなり背中を向けた。

「人の屋敷でこそそそと暮らすような不審者に味方するお前のほうが、むしろ謎だ！　だがお前が何を言おうと私は絶対に許さんからなっ」

「仮にも一城の主なら、そんな心の狭いことを言っではいけません！　お慈悲だつて必要だと思いますっ」

「お慈悲だと？」

ちらりを見た途端にまた、ご主人様はそっぽを向いた。

「だんまりを決めこむ輩にお慈悲だと？　お前の頭は平和ボケが過ぎるな！　誰でも彼でも助ければ善人だとも思っているのかっ。鼻で嗤うぞ！」

「僕のことはいくらでも嗤ってください！　でもっ」

「でも、可哀想です、か？ とことん呆れるな！」

「やめてくれ！」

言い争う僕たちの間に、黒髪の人が割って入った。ようやく声が聞けた僕たちは、ケンカをやめて彼を見る。二人に見詰められた彼は、苦苦しい顔で長い睫毛を伏せた。

「私はアルトリート・フランク。……音楽家だ」

「だからヴァイオリンがあつたのですね！」

ぎこちない自己紹介に僕は笑顔になっていた。ただご主人様の端正な容貌は、相変わらず冷たい怒りに凍り付いている。

「音楽家がなぜここにいる」

ご主人様の問いかけを遮るように、隣の部屋で物音がした。

「隣にも誰か居ます！」

僕が指差すよりも先にご主人様が隣部屋へと行くと、今度は油のような甘く不思議な臭いがする。

「わっ………！」

今度はたくさんのカンバスが飛び込んできて、癖のある臭いが油絵の具だと気付いた。そして今度こそ現れたのは金髪の人ではないか。

「僕が言っていたのは、この人です！」

喜ぶ僕に、男性は苦苦しい表情だ。

「あちらが音楽家なら、お前は画家か？ 随分と暴れたようだな。逆らえば逆らうほどに食い込んだだろう？」

こちらもだんまりを決め込むつもりなのか、金髪の方は鋭く睨む。ダメだ。そんな好戦的な態度じゃ、泥沼化してしまう。

「さつきはちゃんと話をしてくれたじゃないですか。どうして急に黙るんですか？ お話ししましょう？ ね？」

僕の訴えも空しく、男性は視線を逸らした。

「あちらは名乗ったがな——まあ、いいだろう」

そう言うなりご主人様は素早く印を切り、短く息を吐いた。

「——ぐっ！」

途端、苦悶の声を上げた金髪の男性は、眼を見開いて、わなわなと震えだした。歯を食いしばりながら呻く様子に、僕は戸惑い脅えだす。

「ご主人様、やめてください！ 何をしたのですか？」

「締め付けを強くしただけだ。問いに答えぬこいつが悪い」

「そうだとっても、これでは拷問です！」

「ああ、拷問だ。とびきり優しいな」

優しいだなんて、悪趣味だ！

うう……！

男性は腹の底から絞り出すような音を発しながら、激しく頭を振っていた。金色の髪が左右に揺さぶられるたびに、うつむいたこめかみから幾粒の汗がしたたり床に落ちる。

「じつとしてください。素直に話をしましょう？」

「ああ、小間使いの言う通り、質問に答えるかどうかだ。答えなければ尚も強くするだけだぞ？」

男性は青い眼を真つ赤に充血させながら、ぎりぎり歯を食いしばる。

この人が何の目的でご主人様の屋敷に忍び込み、秘密の暮らしをしていたのかは知らないけれど、命懸けで逆らうくらいなら、わざわざ僕の前に現れてご主人様を助けるはずがない。

「ダメです……！ 素直にご主人様の言うことを聞いてくださいっ。
お願いしますっ」

脅える僕を前に、男性は凄まじい雄叫びを上げて大きく仰け反った。——そして、

パン！

と、いう破裂音とともに、ワインの縄が引きちぎれた。

凄まじい勢いで飛散したワインは、床や壁、そして天井にまで飛び散り、同時にワインは僕の顔を容赦なく叩いて、頬を濡らしていた。

僕は一瞬、何が起きたのかわからなかった。

後から遅れて葡萄の香りがふわりとやって来て、ようやく何が起きたのか理解した。僕は眼鏡を外してシャツの袖で拭い、もう一度かけ直すと、目の前にいたはずの男性の姿が無いことに気付いた。

「あれ？」

「待て！」

僕が戸惑っていた矢先に、ご主人様が斑の髪を大きく波打たせな

がら、隣部屋へと走り出す男を追い掛けた。

こうしちゃいられない。僕が立ち上がったそのとき、金色の男の人は大きなカンバスを倒して筆の入った缶を投げつける。こちらめがけて飛んできた缶に、僕の足は竦んでいた、

「リオッ」

はじめて名前を呼ばれた僕の前に、ご主人様が飛び込んできた。

少し遅れて、ガシャン！ と、缶が激しい音を立てて床に転がり、一度二度と弾んで大人しくなった。

「ご、ご主人様！？」

僕は驚いた。まさかご主人様が前に出るなんて……ましてやかばってくれるなんて思わなかった。

驚きと恐怖で浅い息をするたびに、不思議な臭いが鼻を突く。使い込まれた無数の筆が床に散乱したせいで、油の臭いが一層強くなっていた。

「お前は、何をしているっ。あれくらいも除けられないのか！」

「だって……突然飛んできたから」

「ああいうものは、突然飛んでくるものだろう！」

「僕のことはいいです！ お怪我は？ ご主人様にお怪我はありませんか！！」

「そんなものあるかつ」

僕は血の気が失せていた。小間使いをかばうなんて、ご主人様はどうかしてるよつ。本当なら僕こそがご主人様を守らなくっちゃいけないのに！

「よく見せてくださいっ」

「いい、かまうなっ」

「かまいますっ、僕のために楯になるなんて！ じっとして下さってば！」

嫌がるご主人様の腕を掴まえ、僕はお怪我していないか隈無く確認する。

「この程度で大袈裟だ。いいから、手を離せっ」

「でも絵の具でシャツが汚れてます……！ 激しくぶつかっただすよね？ 痣が出来ているかもしれないですっ」

「何が痣だ！ 鬱陶しいから離れろ！」

短気なご主人様は、僕の腕を振り解いて背中を向けていた。よっぽど腹が立ったのか、耳まで真っ赤だ。

「なにもそんなに怒らなくなつて……」

僕は行き場のない悔しさにしょんぼりとなる。

「僕のせいです。ごめんなさいっ」

「お前がなぜ謝る。謝るべきは、あいつだろう！」

指差したその男は、僕たちが駆けつけるよりも早くに、黒髪の音楽家の縄を引きちぎって介抱していた。そのまま逃げるかと思つたが、彼は僕たちが来たのを確認するなり、観念したように肩のこわばりを抜いていった。

「もう逃げやしない。今は謝るよ」

金髪の男性は吐息まじりに言つた。

「アリーは酒が飲めないから、早く助けなきゃならないと思つたんだ。助けるまで足止めするつもりが、手許が狂つちまつた。そのチビ、悪かつたな」

「リオ・アーロンですっ」

チビは、ちょっと嫌だ。ううん。かなり嫌だ。

「ようやく話をする気になつたというわけか」

「ああ。ごらんの通り、アリーは音楽家で俺は画家だ。ヨーナ・イコラ、それが俺の名だ」

「音楽家と画家」

ご主人様はヨーナ・ニコラの言葉を繰り返して腕を組むと、銀色の瞳を細くした。そして――、

「誰がそんな言葉を信じるか」

――冷笑しながら、そう言った。

6・画家と音楽家のいいわけ

「この私の術を一介の画家に破れるはずがない」

「力は強いほうだぜ。金が無かった時代は漁の手伝いもしてたしな。それとも特別なことでもしなけりや、解けない術だったのか？」

疑いの眼に画家は困ったように頭を振っていた。垂れた目尻が困り顔になると余計に下がる気がする。一方、逆に聞かれたご主人様は鋭く睨んだままだ。

「どうやらそういうんじゃないかなーみたいだな」

沈黙を答えと判断したヨーナ・イコラは、白い歯を見せて快活に笑うと、隣のアルトリートが安堵したように息を吐いた。

「許可もなく勝手に上がり込んだことは詫びる」

「見付からなければ謝罪する気もなかったくせに、今更殊勝に頭を下げたところで一体なんの意味がある」

「ご主人様、言い過ぎです」

「お前は黙っている。貴様らは謝ればどこでも潜り込んでねぐらにするのか？ 許可もなく屋敷に忍び込み、主が気づかなければ我が物顔で棲み続けるわけか」

「これがはじめてだよ。家賃が払えずにアパートを追い出されて、棲むところに困ってたんだ。ここは外から見ても不気味な所だし、

何より静かそうだと思ったんだ。創作活動にはうってつけだろ？
空き家だと思って入ったらあんたがいて、逆にびっくりしたんだぜ」

な？ と、ヨーナは相棒に同意を求め、アルトリートも頷いた。

「言つとくけど、あの飲みかけのワインは俺が買ったやつだぜ？
黙って忍び込んで寝泊まりしていたのは事実だが、食費は自分たちの稼ぎでなんとかやってきた」

「ああ。ヨーナの言う通りだ」

アルトリートはご主人様をまつすぐに見返した。

「人が棲んでいるとわかったときは驚いたが、貧乏暮らしで出て行けるほどの稼ぎはなくて、やむを得ず居続けた」

「やむを得ずときたか」

ご主人様が高飛車に笑い飛ばす。

「言わせてもらえば、あなたもあなただ。帰って来れば玄関ホールで朝を迎えて、朝風呂が終わればさっさと出て行くばかり。この二年、我々がこの屋敷で暮らしていたことに一度たりとも気付かなかったではないですか」

な……！

僕とご主人様の声が見事に重なった。

「二年！？ 二年も前からいたというのか？」

ご主人様は呆然として頭を押さえた。

「信じられない……二年も前からだって……？」

「僕が来なかったら、一生気付かなかったかもしれませんよ」

僕はすこぶる呆れながら、ずれた眼鏡を直した。

確かに大きなお屋敷だけど、二年も赤の他人がいると知らずに棲んでいたなんてゾツとする。僕は鳥肌を立てたけど、ご主人様は信じないと言うように頭を振った。

「そんな筈はない。敷地内には結界を張っているのだ。私の許可を得ていない者は何人たりとも入ることはできません！」

「待つてください、それでは僕はなぜ入れたんですか？ 普通にお屋敷に入れちゃいましたけど……」

「お前は師の手紙を持っていたではないか。それが結界を通過する入場券の代わりになったただけだ」

「あ、なるほどお！ あの手紙にも一種の魔法が掛けられていたというわけですね！ すごいですっ」

タウトさんはご主人様のお師匠様で、やっぱり魔法使いだったんだ。今度会ったら良くお礼を言っておかなくちゃ！

「でも、それならばなぜお二人は入れたのでしょうか？」

問題はそこだが、当の二人も不思議そうな顔つきだ。

「入れたぞ、なあ」

「ああ」

ヨーナに同意を求められたアルトリートも頷いた。

「特に制限されたような心地も無かつたし、普通に入ってきたつもりだ」

「そんなはずはない！ 私の魔導術は完璧だツ、この結界も最上級の印で紡がれ、鉄壁の防御を誇るものだし、たとえ我が師だろうと破ることは困難だ。それが音楽家と画家ごときに容易く入れるはずがないだろうツ」

「だがなあ……俺もアリーも入れたぞ？」

当然ご主人様は激怒したが、二人は互いに困惑の表情だ。

「我々は本当に何もしていない。満月の夜、堂々と門をくぐって屋敷に入っただけだ」

「——なに……っ」

ご主人様の端正なお顔が凍り付いた。気付かない二人は、互いに頷きあい、ヨーナは付け足した。

「ああ。おっきな満月で、暗い屋敷の中もよく見えていたのを覚えている」

あれ？

反論するかと思いきや、ご主人様は沈黙してしまったではないか。血の気が無くなるほどに拳を握り締めながら、唇を噛み締める。

ご主人様……？

一体どうなされたのでしょうか？

この短い時間でご主人様の気の強さは十分理解したつもりだけど、今の態度は少し気になった。僕の心配する視線に気付いたのか、血の気が失せた指が斑の髪をかき上げる。

その手が震えていたのは気のせい……かな？

「ここを追い出されたら行く所が無くなっちまう。俺たち今まで邪魔をしたことなんてないだろ？ 貧乏が取り柄だが家財を売ったことは一度たりともねえし、生活費くらいは自分でなんとか稼いでるつもりだ。お慈悲で置いてはくれねえか？」

「私からもお願いする。けっして貴公の邪魔はしないと約束しよう。どうか頼む」

「黙れ。今すぐ荷物をまとめて出て行け」

「ご主人様、僕からもお願いします！」

頭を下げる二人の前に立ち、僕も訴えた。

「ヨーナさんはご主人様がお風呂場で寝てるかもしれないことを僕に教えた人です。教えてもらわなかったら、ご主人様は今頃風邪をひいていたかもしれないですし、溺れていたかも知れないんですよ！ 言わば恩人のようなものです」

「恩人だと！？ よくもまあ、大袈裟に言ってくれたものだ。風呂で寝るくらい良くあることだし、風邪をひいたくらいで恩人氣取りされてはたまったものじゃない。お前もそいつらの味方ならば出て行け！」

「嫌です！ 僕はタウトさんの紹介で来たんです。それにご主人様は「師の命令なら断れない」と言っただじゃないですかっ」

小間使いに言われて、ご主人様はむっとする。

「……つまらないことばかり良く覚えている小間使いだ」

「家賃は払う！」

「そんなものいらん！」

ヨーナの提案に、ご主人様は容赦なく一蹴した。

「でしたらお雇いになってはどうですか！ 音楽家がいればお屋敷で音楽が聴けます。それに画家がいれば絵を描いてもらえます。殺風景なお屋敷がきつとにぎやかになりますよ！」

わ！ すごい！

なんてステキな提案だろう！

僕は自分の閃きに目を輝かせていたけれど、ご主人様はこの世で最も恐ろしいものを見たような顔をして、ゆるゆると頭を振っていた。そうして肺の底からすべての息を絞り出すような溜め息を吐くと、トドメのようにもう一度頭を振っていた。

「お前は……どうかしている」

指差す手がしんなりとしていた。

「本当にどうかしている」

「そんなことはありません！　ちよつ、そんなに弱々しく力説しないでくださいよお」

「力説もしたくなる。お前は本当にどうかしている。ああ、どうかしているんだ！　人の屋敷で断りもなく暮らしていた連中を掴まえて、にぎやかになる——だと？　それならばお前は夜中にこそ泥を見付けても、同じことを思うのか？」

くくく……と、忍び笑い、ご主人様の肩が震えていた。

「画家だと？　音楽家だと？　そんなものそいつらが言っているだけで、真実かどうかもわからないではないかつ。よくもそんなことで人を信じられるな！　少しは人を疑え！」

「ご主人様こそ、人を信じてはどうですか！」

僕は負けじと声を大きくした。

「たしかに二人は、黙って二年も棲み続けていたかもしれませんが、アルトリートさんが捕まったときにヨーナさんは急いで縄を解こうとしたんですよ？ 本当に悪い人ならアルトリートさんを放つて、自分だけ逃げるに決まっています」

「チビちゃん……」

チビは余計だよ！

「仮にもしアルトリートさんを置いていけない事情があったとしても、あの時点で二人は逃げようとしていたはずですよ！」

僕は拳を握り締める。

「アルトリートさんもヨーナさんも自分たちの行いを認めて、ご主人様に謝りました！ 罪を憎んで人を憎まずという言葉があるように、僕は罪を認めた二人を擁護します！」

「……罪を憎んで人を憎まず。——なんて、いい言葉だ」

アルトリートが噛み締めるように呟いた。

「おまえたち……」

僕の力強い訴えに瞠目していたご主人様は、それでも尚、受け入れがたい表情をしていたけれど僕は諦めない。

熱のこもる瞳を一心に向け続けると、ご主人様はすこぶる迷惑そうに顔をしかめながら、ゆっくりと視線を逸らしていった。

「本当にどうかしてる」

ご主人様が心なしか頂垂れていた。

「人が多いほうが毎日にぎやかで楽しいですよ」

「にぎやかで……楽しい——か」

どうかしてる。

ご主人様は念を押すように小声で言うと、渋々とそして少しだけ忌々しげに二人を見た。

「——おまえたちの行動如何では、すぐにも叩き出してやるから覚悟しろ！」

わ！

それはつまり、二人を許してくれたということですね！

「ご主人様、ありがとうございます！」

気難しいご主人様が、僕のわがまを聞いてくれたんだ！

嬉しくてご主人様に抱きつきたかったけれど、そんなことをしたらせつかくお許しを貰ったのに翻されてしまうかもしれない。抱き

つく寸前でガマンした僕は振り返った。

「良かったですね！ 晴れて、このお屋敷の正式な住人ですよ！」

「ああ、チビちゃんのおかげだぜ！」

「チビちゃんじゃなくて、リオです！ リオ・アーンです！」

「リオちゃん！ 感謝するぜ！」

わあ！

ヨーナに抱きしめられた僕は真っ赤になった。アルトリートも静かに喜びを噛み締めて、僕に向かって頭を下げる。

「ありがとう、リオ」

「いえ！ どうぞ宜しくお願いします、アルトリートさん！」

僕は興奮のあまり声を弾ませていた。——でもそのとき、ご主人様がつまらなそうに鼻を鳴らして、部屋から出て行ったことに僕は気付きもしなかった。

7・名門の魔法使い様

「……とりあえず着替えてくる」

そう言ってアルトリートは部屋を出て行った。

「あれ？ ご主人様は？」

「さつき出て行ったぞ。すっげー機嫌悪そうな顔だったぜ？ そっとして置いたらどうだ？」

行こうとする僕の腕を掴み、ヨーナさんが背後から抱きしめる。
逞しい腕に押さえ込まれた僕は、身動き出来ないまま焦った。しかもお酒くさい。

「ヨーナさん、お酒くさいですっ」

「いいじゃんいいじゃん、良い匂いだぜ」

「僕、ご主人様の朝食の準備をしなくっちゃ！ あ、でもまだ食材を買っていないから何もないんだった。昨日焼いたパンとスープしかないっ」

昨日あるだけの食材を使ってしまったし、朝一で市場へ行こうと思っていたのに予定が狂ってしまった。外はすっかり日が高くなっ

ているし、もうじき昼だろうか。

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。チビちゃんのご主人様は、ご機嫌が悪いときはいつも寝ちまうんだぜ。一度寝たらなかなか起きないのは、チビちゃんも知ってたんだろ？」

「チビちゃんじゃなくって、リオですつ。背があんまり伸びないの、気にしてるんですよ……っ」

ふて腐れ気味に訴える僕にヨーナは豪快に笑って、これでもかと頭を撫でまくった。わっわっわっと視界がぐるぐる廻って、髪の毛がもじゃもじゃだ。

「ヨーナさん！」

「リオちゃんが悪そうな奴じゃなくて良かったよ！ レーヴィ様は気難しいので有名だからなあ、小間使いまでそんな奴だったらマジで頭が痛かったぜ」

「ヨーナさんはやっぱりご主人様のことを良く御存じなのですか？ タウトさんのことも知ってらっしゃいましたよね？」

「魔導師レーヴィも、魔導師タウトもこの国じゃ有名だ」

座るか？ と、ヨーナは肘掛け椅子を指差した。

続きを聞きたい僕はお酒くさいのも忘れて腰掛けると、彼は隣部屋からチヨコチップがいっぱい入ったクッキーの丸缶を持って来た。

「ぼ、僕、お茶を淹れますね！」

「アリーが持ってくるさ。大人しく座ってな」

そう言っ、ヨーナも肘掛け椅子に腰掛けた。間もなくして着替えを済ませてきたアルトリートが、本当に紅茶のポットを持ってきた。

「ヨーナさんの言ったことが本当になった！　すごいですっ。ヨナさんとアルトリートさんは本当に仲良しなんですね！」

「それは誤解だ。これが一方的につきまとってくるだけだ」

ティーカップに紅茶を注ぎながら、アルトリートは心底嫌そうに返事をした。途端にヨーナが大袈裟に肩をすくめる。

「それは冷たい発言だ。俺たちは深い絆で結ばれているはずだぜ？」

「困ったことにな」

それは否定しないんですね。僕はくすりと笑って、ティーカップを受け取る。

テーブルを挟んで二人が向き合うつと、とても絵になった。——と言っても、女たらしが淑女を必死に口説いているかんじのコミカルな絵だ。もちろん淑女は相手にしていない顔。

「お二人はどういう関係なのですか？」

「ん？　単なる友達さ。芸術家ってのは自然と集まるもんなんだ。気がついたら一緒に寝泊まりしててさ。ヴァイオリンの音色も気持

ちいいしな。筆も滑らかに動くんだ」

「私は油絵の具の臭いは嫌いだが」

「こついうところも、なかなかの奴だろ？」

ニツと笑って、ヨーナが相棒を親指で差した。

「ご主人様も仲良くしてくださるといいですけど」

「気難しい方だからな」

「おまけに人嫌いときた」

ヨーナが苦笑いで付け加えた。

「僕、ご主人様を起こして来ましょうか。せつかく皆さんと打ち解ける場が出来たのに、一人でお部屋に閉じこもっているなんて寂しいです」

「おいおい、眠っているのに起こすのか？ やめとけやめとけ。触らぬ神に祟りなしと、東国では言うそうだぞ」

「まあそうですね」

「腹が減ったら起きてくるさ。休日には昼寝か読書か、そんなことしかしてないからな」

「ああ。小腹が空いたときはワインと買い置き野菜を齧っていた」

「そつ。そんなにひどい食生活だったんですか？」

僕が目を丸くすると、二人は二人で似たようなものだという顔を
していて、シヨックのあまりテーブルに突っ伏した。

「食事は生活の基本ですよ！ 健やかな暮らしは食生活にアリです
！ あたたくくて美味しい食事が毎日食べられたら、それだけで幸
せって思いませんか？」

「そら思つよ」

ああ、とアルトリートが大きく相槌を打つ。

「だったら、これからはちゃんとした食事を摂りましょうね！ 僕、
がんばります！ こう見えても料理は得意なんですよ！」

「かーっ！ いい子が来たなあ。リオちゃんが来てくれたおかげ
で、あったかい飯が食えると思うと、タウト様には感謝してもし尽
くせねーよ」

「ああ、まったくだ」

拳を握り締める僕を見て、ヨーナはしみじみと言葉を噛み締めた。
アルトリートまで小刻みに頷いて、しんみりとした顔だ。

野菜さえあれば、塩と胡椒で簡単なスープが出来るのに。

「お二人はタウトさんを御存じなんですよね？ ご主人様とタウト
さんのお話しをもっと聞かせてください！ なぜお二人は有名なの
ですか？」

「そりゃあ、力の強い魔導師様だからさ」

ヨーナは端的に答え、紅茶の中に一つ二つ、三つと粉砂糖を入れていった。

向かいの席のアルトリートが粉砂糖であふれかえりそうなティーカップを嫌そうに見つめている。睫毛が長く、柳眉の美しい細面な美形のアルトリートが顔をしかめると、全身から針のオーラが飛び出ている感じがだ。

「アストラ、イーオ、そしてタウトにレーヴィは、この国で格式高く「名門」と呼ばれる魔導師の一派だ。四大魔導師と呼んでも過言ではない」

「そ。レーヴィ様はこの国のなかで「天才」と呼ぶべき魔導師様さ。そのきれいな容姿も話題を呼んで、アストラ、イーオにタウト、そしてレーヴィはこの国で一番人気の男たちさ。と言っても、アストラ様の顔を見た人はほとんどいねーから、想像だけだな」

アルトリートの丁寧な説明のあとで、ヨーナが付け足した。

「あの、マドウシってなんですか？」

「ん？」

ヨーナのたらし顔が硬直した。

「マドウシです」

胸を弾ませながら答えを待つ僕に、二人は黙り込む。

「もしかして君は……異国人か？」

怪訝そうにするアルトリートに向かって、僕は元気に頷いた。

「この国に来てまだ日が浅いんです。よくわからないことも多くつて。呪術師とかシャーマンとかそういうものですか？ 魔法使いとは違うんですか？」

二人に言われるまでタウトさんとご主人様が有名人だなんてことも知らなかったし、マドウシなんて聞いたこともない。次々と質問する僕に二人は顔を見合わせると、一斉に振り返り僕に言った。

「魔法使いだよ！」

「ああ、魔法使いだ！」

二人はばらばらに、同じことを言った。

「魔法使いみたいなもんだ。間違いねーよ」

「ああ。ヨーナの言う通りだ。呼び名が違っただけで、意味は同じだ」

「魔法使い……！」

やっぱりそうなんだ！

僕は興奮で頬を赤らめながら身を乗り出した。

「魔法使いなんて物語のなかだけだと思っていましたが、本当にいるんですね！　もちろん、いい魔法使いですよね！？」

「ああ、もちろんさ！　この国になくってはならねー、大事な魔法使いさー！」

「おおお……！　すつ、すばらしいですつ」

冒険好きな奥様と一緒に世界じゅうを旅したけれど、まだまだ世界は不思議なことだらけ！　しかも魔法使いだって！

魔法使いが実在したことさえ驚きなのに、魔法使いのいる国に来てしまったなんて、しかもご主人様が有名な魔法使いだなんて！

「そんなすごい方の下で働けるなんて、僕は幸せ者ですつ」

感動の涙で僕の目はうるうるとしていた。二人はそんな僕を見て少し呆気にとられていたようだけど、すぐにも微苦笑に変わっている。

はじめて魔法を見せてもらったときのご主人様は素っ気なかったのは、僕に騒がれて照れていたのかもしれない。気難しくて怒りっぱい人だけど、でもその正体はすばらしい魔法使い様なんだ。

「やっぱり朝食の準備をします！　朝食は一日の基本ですし、僕がご主人様を支えなければつ。紅茶ごちそうさまでした！」

紅茶を飲み干して、アルトリートさんにお礼を言つと、僕はキツチンへと小走りになった。

そんな僕を二人は止めたけれど、じつとしていらなかった。

* * *

「起こしたら余計に機嫌悪くするつてのが、わからんのかねえ」

鼻息荒く部屋を出て行つたりオに一笑したヨーナは、砂糖で体積の増した紅茶を一口飲んだあと、もう二粒追加した。

「砂糖の入れすぎで虫歯になるぞ。だいいち、お前もお前だ。安易に人前に出て、何かあつたらどうするつもりだったのだ」

「小間使いが来た時点でバレるのは時間の問題だろ？ だつたら先にあの小間使いの正体を見極めたほうがいいと思つてさ。素生の暗い奴なら、レーヴィに気付かれる前に追い出すことも考えてた」

「――で、大丈夫だと判断したのか？ お前は甘いから心配だ。あの小間使い、本当に信頼できるのか？ 本当にタウト様の紹介なのか？」

アルトリートの眼光は自然と鋭くなるが、相棒の疑り深さを良く知るヨーナにとっては、いつものことだ。

「紹介状には本物と知らしめるサインも印もあつたから、間違いく本物だぜ？　俺が確かめたから間違いない」

「だとしたら、なぜこんなときに――」

アルトリートは黒く美しい瞳をハツと見開いた。

「卵はどうした。昨日運ばれる予定だったのだろう？　玄関で目覚めるはずのレーヴィが寝室で目覚めたということは、卵も寝室に運ばれたのか？」

「いや……見ていない。レーヴィを運んだのはリオだぜ？　持つて行ったとは思えねえ」

――だとしたら……？

そのとき、キッチンのほうからリオの叫び声がして、二人は勢いよく部屋を飛び出した。駆けつけると、厨房の隅っこでうずくまっていたリオがいる。

「どうした、リオちゃん」

ヨーナは恐る恐る近付いて声かけた。

「あ！　ヨーナさん！　アルトリートさんも……っ」

二人が来たことに気付いたりオは、涙目になりながら振り返った。

「赤ちゃんって卵から産まれてくるものなんですか!？」

「え?」

ヨーナとアルトリートは仰天した。

「卵の中から、赤ちゃんが出て来たんですけどお……!」

大混乱で顔を真っ赤にしているリオの両手の平には、ちいちいと泣きじゃくる、小さな——本当に小さな赤ん坊がいた。

それは、この国で「悪魔」と呼ばれる赤ん坊だった。

8・リオと悪魔と暴君と

「――そ、その赤ん坊は特別だ」

凜然としたアルトリートがヨーナの腕を掴み、声高に叫んだ。

「なぜここに悪魔の卵があるんだっ。ヨーナ！」

「俺がわかるわけねーだろっ！　なんでリオちゃんが！」

混乱したヨーナは金色の髪を掻き耷る。

「スーブを温めようと竈に炭を入れていたんです。ふと脇を見たら、竈の隅っこにまん丸の大きな卵があるのに気が付いて、持った途端に亀裂が走って、そ、それでいきなりです！」

二人が混乱するように、とにかく僕も混乱してる。それにっられ
てか、赤ん坊まで僕の手の平でちいちいと泣きじゃくっていた。

「ど、どうしよう。お母さんはいないんですか？」

「いない」

「でも、赤ちゃん一人でこのままにしておいたら大変ですよっ」

「いないっいたらいないんだ」

冷静そうなアルトリートまで少し焦っているようだ。

「その子が今産まれるべきだと選んだから、産まれたんだ」

「え……？　どういうことですか？」

「リオちゃんのそばなら産まれても安全だって思ったんだろ。だからその子は卵を割って産まれてきたんだ」

僕は言っている意味がよくわからなくて戸惑っていた。つまりこの子は僕を信じて、自分から卵を割って出て来たってことかな……？

黒髪のかわいい男の子だった。泣きじゃくる小さな口には、バラのトゲよりも小さい牙が二つ見える。人の赤ん坊にしては小さい。多分、体長十五センチくらいの赤ん坊だ。

まるで小人だ。

小人？

本当に？

「あの、この子って……一体」

「悪魔の子だ」

アルトリートは低く強張った声で返事した。

「悪魔！　この子がですか！？」

ぎよつとした僕に、ヨーナが左右に手を振る。

「この国では「悪魔」と呼ばれる生き物だけど、悪さをするわけじゃない。海の向こうじゃ「精霊」とか「妖精」とか言われるんだろ？ 多分そういう感じの生き物だ」

「多分って、精霊も妖精もたぶらかしたりしますよ！ そういうふうに言われているところは多いです」

「じゃあ違う。なんだっていいさ、でも悪い生き物じゃねーし、黒髪はすげー貴重だ。俺ははじめて見る」

「ああ……」

アルトリートもそれに気付いたのか、赤ん坊をまじまじと見ていた。

「鈍色じゃねーよな？ 正真正銘の黒髪だ。すげえ」

ぷ！

赤ん坊見たさに近付いたヨーナに驚いたのか、黒髪の赤ん坊は口を膨らませる。幼いながらも威嚇しているみたいで、ヨーナは苦笑いで身を引いたが、今度はアルトリートが覗き込む。

「黒い髪に紫の瞳。間違いなく黒髪の子だろうな。プライドも高い」

ぷ！

赤ん坊はまた怒って、僕の親指にしがみついた。

「そんなに珍しい子なんですか？」

僕にとっては珍しいどころの騒ぎじゃないけれど、今までとは違う二人の様子に僕まで気になってしまうよ。

「悪魔自体はそう珍しいもんじゃねーけど、黒髪が珍しいんだ。いや、珍しいなんてもんじゃねー。一生に一度拝めるかどうかってところだ」

「そんなに？」

僕は驚いて、アルトリートを見た。

「私も黒髪を見たのははじめてだ。町に一人いると聞いたことがあるが、お目にかかったのは今日がはじめてだ」

その顔は「悪魔」を前にして恐怖するというより、感動している感じがした。

「たぶらかしたり、地獄に堕としたりするわけじゃないんですか？」

「しない。仲良くなれば、むしろありがたい存在だ」

そう言ったあとで、アルトリートは大きくため息を吐く。その様子からして、何か落胆することがあったようだけど、僕はそれよりもこの子のことで頭がいっぱいだった。

「でもどうして僕なんかに」

じつと見詰めていると、赤ん坊は泣くのをやめて、涙で濡れた瞳でじつと見つめ返してきた。でもまだ泣き足りていないような顔だ。唇をきゅっと噛み締めて、僕の親指を握り締めている。

手も小さい。おなかがぷっくりしてる。

——かわいい。

悪魔と聞いて驚いたけど、手の平の上の赤ん坊はとっても可愛くて、僕は自然と笑顔になっていた。そのせいなのかな？ さっきまで泣きべそ顔だった赤ん坊まで、にっこり笑顔になっていた。

「君はいい悪魔なの？」

笑顔で尋ねた僕に、赤ん坊は「ち！」と鳴いて、小さな手で涙を拭った。拭ったあとで僕の指に身体を擦り付けてくる。それってこの子なりのスキンシップなのかな？

嬉しくなって頭を撫でてやると、ほっぺを桃色に染めてきやつきや！ と、声を弾ませ笑いだした。途端に大きな紫の瞳をきらきらさせて、腕をよじ登ろうとする。

「わっ、あぶないよ」

胸の上で抱きしめてやると、小さな手の平を伸ばしてシャツを登りはじめた。一体どうしたいんだろ！僕は急に楽しくなってきた。小さな悪魔の好きなようにさせてみた。

そしたらね。

「ち！　ち！」

赤ん坊は僕の鎖骨あたりまで上って来て、そこからぺちゃっと僕の顔に飛び移った。

「わっ！」

僕のほっぺたにしがみついた赤ん坊はほっぺたを桃色にして、につこりしてる。大満足！　って顔だよ。もしかしてこれがしたかったの？

「変な子だなあ！」

赤ん坊の笑顔につられて僕まで笑い出すと、赤ん坊は、ぷ、ぷ！と、不思議なリズムで歌い出す。産まれたばかりなのに、この子は僕を笑顔にする方法を知っているのかな？

「……完全に懷いてやがる」

背後でヨーナが感心ながら顎を撫でた。

「ああ、リオを保護者に決めてしまったようだ」

「僕が親代わりになるんですか？　でも、ご主人様がお許しくださるか………あ、ご主人様！」

二人の後ろの扉口に、いないはずのご主人様が立っていた。

「お部屋へ行かれたのではなかったのですか？」

「水を飲みに来ただけだ」

ぶつきらぼうに返事したご主人様は、僕のほうをじっと見て、信じられないというように眼を見開いている。視線の向かう先は間違はなく悪魔の子だ。僕は狼狽えた。

タイミングが悪いよ。もっとちゃんと落ち着いてお話ししたかったのに！

「あの、これは」

「その悪魔はなんだ。どこから連れてきた」

「竈の近くに卵が落ちていたんです。僕が拾ったら突然割れてこの子が出て来て」

ぷい！

と、腕の中の赤ん坊が口を尖らせて、ううと威嚇する。こ、こら！ ご主人様にそんなことしちゃ駄目だ！

「卵が竈にあっただと？ では悪魔の卵が自力でここまで来たというのか？」

「わかりません。でも竈の脇にあったのは本当なんです」

ご主人様は白い眉相に深い深い皺を刻みながら赤ん坊を見たあとで、アルトリートとヨーナの背中へと交互に視線を動かした。けれど二人は、僕のほうを見たり振り返ろうとしない。

「おまえたち何か知っているな」

ぞっとするような低い声だった。

「いいや」

「しらねー」

二人は競うように素早く答え、互いに頷きあう。

「俺たちもちオちゃんの声に気付いて来たんだ。そしたら悪魔が泣いていたのさ、な、アリー？」

「ああ、ヨーナの言う通りだ」

「ふうん」

ご主人様はすこぶる冷ややかに二人を凝視して、思案するように細い顎を撫でていた。全身から張り詰めたオーラを発する様子に、腕の中の赤ん坊の威嚇は止まらない。ぼ、僕だって、ちょっと威嚇したいくらいのぴりぴりさだ。

「おい、昨夜私が帰ってきたとき、お前が寝室へ運んだと言ったな」

ご主人様は僕を鋭く睨んだ。

「は、はい。僕が眠っているご主人様を寢室へ運びました」

「誰かに運ばれて来たところを見たか？」

「はい！」

馬車の轍の音が聞こえて、ご主人様が帰ってきたと思った僕は厨房から飛び出したんだ。そしたら制服を着た男性二人が、ご主人様を抱えて入ってきた。

「そのとき何か置いて行かなかったか？」

ご主人様の問いに、ヨーナが天を仰ぎ髪をかき上げていた。隣のアルトリートは無言で顔を背けてる。僕は大きく頷いた。

「はい！ 籐の籠を置いて行きました。ご主人様のことばかり考えていて、あのとき何が入っていたのかは確かめてなかったですが、間違いなく籐の籠です」

ふん。

鼻息一つ。

ご主人様がいきなり印を切り、短い呼気とともに水瓶の蓋が跳ねて、床の上で円を描く。

みんなの視線が音のしたほうへ動くと、瓶の中の水が一筋の細蛇となって素早く飛び出した。間もなくして籐の籠を口にくわえてくると、ご主人様につやうやしく差し出す。そして水蛇はご主人様が

受け取ったのを確信すると、飛沫を上げて飛散してしまった。

（み、床が水浸し……！）

もしかしてワインのときも同じだろうか？　だとしたら部屋じゅうワインだらけだ。

「お前が言ったのはこれか？」

「は、はい！」

仕事が増えたことに嘆いた僕は、こくこくと頷いた。

「暗がりでも見えましたから、よく覚えています！」

「あいつらあ……………！」

ご主人様が怒気で身体を震わせるなり、藤の籠がざわざわと妙な音を立てはじめ。美しく編み込まれた細枝がぱきぱきと音を立てながら針鼠のように逆立っていった。

しまいにはボツ！　と、鈍い破裂音を立て、木端微塵で床に散らばってしまったではないか。

ぷ！　腕の中の小悪魔がおどろいて、小さな肩を弾ませてる。僕も驚いた。だって、いきなり籠が弾け飛ぶなんて！

あ！！　粉々になった藤の細枝が床じゅうに散らばってる！　またお掃除しなくっちゃー！　——そんな僕の泣き言はさておき、激怒しているご主人様はアルトリートとヨーナを抜け、僕の前に立つ

た。

「あのっ、この子は」

まだ産まれたばかりで。

「不愉快だ。森へ捨ててこい」

冷たすぎる一言に僕は目を見開いた。

「え……………？」

今、…………なんて…………？

「今すぐ捨ててこい」

「おい、それはあんまりだろうよ」

ヨーナが信じられない顔で肩をすくめてる。

「この屋敷の主人は私だ！ 私の命令が聞けないのなら、今すぐその悪魔と一緒に出て行け！」

「でも！ でもこの子はまだ産まれたばかりで、捨ててくるなんてそんな可哀想なことは出来ませんっ」

「産まれたばかり？ 可哀想？ 知らん！ それがどうしたつ、私はそんなもの見たくはないのだ、捨てられたくなければ、そいつと一緒にどこへでも行つてしまえッ」

「ご主人様！」

「おい、いい加減にしろよっ」

ヨーナがご主人様の肩を掴んだそのとき、電流が弾けたような音がして、ヨーナは腕を押さえながら大きく身を引いた。

「ご主人様、何をしたのですか？ ヨーナさん、大丈夫ですか!？」

「大したことねーよ。あんたも少し落ち着けつて」

そう言いながら、けわしい顔でヨーナは腕をさすっているが、ご主人様の怒りの空気は変わらないままだ。

「ご主人様……どうして」

なぜですか？ どうして……………。

「怒りを収められよ。あなたがこの屋敷の主人だと言うなら、少し冷静になるべきだ」

アルトリートは黒く輝く聡明な瞳で、ご主人様に語りかける。

「リオも私もこの馬鹿も、貴公の術に太刀打ちできる術を持っていないのだ。それなのに貴公が術を振りかざしては、我々は脅えるしかできないではないか」

「おまえたちが何を言おうと私の答えは変わらない。悪魔など誰が飼うか！ 今すぐ捨ててこいッ」

「無理です……っ、こんな……こんな……」

こんな弱々しい子を捨てられるわけがない……。

僕は潤む瞳で赤ん坊をじっと見詰めていた。腕の中の赤ん坊は、ちいちいと泣いて僕にしがみついている。

「僕………」

言葉の途中で悲しみが込み上げてきて、僕は唇を噛み締めていた。もう一度ちゃんと話せるようになるまで気持ちを落ち着かせた僕は、そつとご主人様を仰ぎ見る。

鋭い視線だ。じわあと目頭が熱くなる。

「僕……こんなに幼い子を森へ捨てるなんてこと出来ません」

鼻をすすった僕に、ご主人様は怒り顔で睨み返していた。悲しい。笑うときつとすぐ素敵なはずのに、いつも怒り顔だ。

「……ご主人様の言いつけ通り屋敷を出ます。短い間でしたが、ありがとうございました」

ちい。

と、赤ん坊のさみしげな声を聞いた僕は、深く頭を下げていた。

その拍子に涙が一粒落ちて、眼鏡を濡らしている。

ああ……。

一度くらい、ご主人様の笑顔が見たかったな――。

でも。

……でも、その夢は叶わないみたい。

9・僕の居場所

僕の一言で、厨房の中は一瞬だけ静まり返っていた。だけど腕の中の悪魔の赤ん坊だけは、小さな声でちいちい、ちいちいと泣いて僕の腕に何度も何度も顔を擦り付けてくる。

僕は小さく微笑んで、そっと赤ん坊の頭を撫でてやると、「ぷ」と口を尖らせて、僕の親指に抱きついていた。

ご主人様の返事は無かった。返事を待っていたけれど、じっとしていられなくなった僕は作り笑いで声を弾ませる。

「まだ荷物はトランクの中なんです。あ、昨日作ったものですけど、スープとパンがありますから温めて召し上がってくださいね！」

厨房の隅っこで置き去りにしていたトランクを持つと、昨日よりもずしりと重みを感じて、ぐっと涙が溢れそうになった。

「ヨーナさん、アルトリートさん、短い間ですが仲良くしてくださいね！ありがとうございますございました。ちゃんとお食事取ってくださいね！」

「駄目だ、リオ」

アルトリートはけわしい表情で頭を振った。

「でも、この子は放っておけませんから」

過ごした時間は僅かでも、こうして真剣になってくれることが僕にとっては嬉しいことだ。さっきよりもっと大きな笑顔になったつもりだけど、本当は情け無い顔しているんだろうな……。

「おい、レヴィ。本当にこれでいいのかよ！　ここで止めなかったら、お前一生後悔するぞ！」

「ああ、ヨーナの言う通りだつ。リオと過ごした時間は短くても、この子がまっすぐで正直な良い子であることは私でもよくわかる。貴公は私たち以上にリオを見ていたのだから、この子がどれほど辛い選択をしているか理解しているはずだ！　考え直されよッ」

「おお、そうだ！　言っとくけどな、アリーが人を誉めるなんて滅多にないんだからなつ。俺なんて何十年も一緒にいるのに誉められたのは一度か二度なんだぞッ」

「一度だつてありはしない！　お前を認めるくらいなら、死んだほうがマシだ！」

「遠巻きに告白するなら、ストレートに言ってくれ！」

「そついうところが大嫌いなんだッ」

完全に主旨がずれているが、でこぼこな二人が必死で僕を庇ってくれることが嬉しかった。眼鏡を外して涙を拭いた僕は、小さな溜め息の後で覚悟を決めた。

「僕は行きます。皆さん、お元気で」

「リオ！」

「リオちゃんッ」

二人が一斉に呼び止めたけど心は決まっていた。困惑する二人に微笑んだ僕は、腕の中の小さな赤ん坊をそっと抱きしめると、厨房を出て長い廊下を一人歩く。

「ち！」

僕がいつしよにいるよ！——って言っている気がして、僕は自然と笑顔になっていた。

僕は知ってる。人生は何事も冒険だつて。それは奥様の口癖の一つで、怖いときや不安なときに唱える魔法の言葉だ。

「人生は何事も冒険だよ」

ほら、唱えた途端に怖いことも不安なことも、少しだけチャレンジしてみようって気持ちになれるもの。僕はこれから寂しくなるんじゃない、新しい冒険に旅立つだけだ。そこには新しい相棒がいる。

「とにかく寝床になる場所を見付けて、お前に服を着せないとね」

何か食べるものを用意しないとな。赤ん坊だものミルクが必要だよ。懐はかなり厳しいけれど、どこかで雇ってもらえれば少しは食いつなげるかもしれないし、冒険は今じまったばかりだ。

とはいえ、このお屋敷に少しの愛着があっただ。だって昨日来たときは、廊下の天井という天井が蜘蛛の巣だらけで、床は床で砂

だらけ。歴代の足跡が残っているような真っ白な床だったのに、今はぴっかぴかなんだ。

あーあ……魔法使い様ともお別れだ。

レーヴィ様は怖いお人だったけれど、でも、心の底から怖いとは思えなかったんだ。なんていうか意地っ張り？ そんなことを言ったら本人に怒られそうだけど、僕は仲良しになりたかったし、なれると思ったんだ。

「……」

じわりと目頭が熱くなってきた、僕は慌てて上を向いていた。長い直線の廊下を抜け、彫像が立ち並ぶ玄関ホールまで来た。扉はすぐ目の前だ。

ああ、さようなら。

短い間だったけど、ありがとう！

涙が出るのを堪えながら、大きな玄関扉を押し開く。

ぎ……と、軋みながらゆっくりと開かれると、緑の木々と外光が僕を手招きする。

僕は新しい未来に一步、踏み出した。

「リオ！」

（！）

レーヴィ様の声に、僕は肩をいかせて瞠目していた。

ああ、その声は間違いなくレーヴィ様の声だ。でも嘘だ。だって………だって。じわりと涙がにじんできて、堪える前に頬を滑り落ちていた。

ぷ！

小さな赤ん坊が頬を濡らしたそれを指差して、不安そうにしてる。僕はぎこちなく微笑んだけど、涙が次々に零れてく。

「私にはお前の考えることや行動がまったくわからない！ あいつらのときは、私に噛み付くほど訴えたくせに、小悪魔のときはあっさり身を引いた。それはなぜだ」

「それは………」

僕は涙を拭わないまま振り返って、まっすぐにレーヴィ様を見返した。途端にレーヴィ様はけわしい顔をして視線を逸らしてしまっただけ、でもまた僕を力強く見返した。

「お二人には住む場所が必要です。でもこの子は親が必要だからです」

ち、と悪魔の子が大きな瞳をぱちくりした。

「この子は僕を親に決めたって、ヨーナさんが言っていました。悪魔の子は、育ての親を選ぶんですよね？ それなら僕はこの子の親にならなければいけません。……親が子を捨てるなんてこと、僕はし

たくない」

「……だからお前は身を引いたのか」

「はい」

ご主人様は深くうつむきながら強く拳を握り締める。レーヴィ様にはレーヴィ様で、悪魔を嫌う理由があるのかもしれない。だからこんなにも頑なで、くるしげな顔をしているんだ。

それは僕に言えないことなのかな？

（違うよ。……僕たちは出合ってまだ二日目なんだ）

環境にすぐさま馴染める人がいれば、その逆の人がいるように、レーヴィ様はレーヴィ様なりに僕やヨーナさんに馴染もうと努力しているのかもしれない。だって、今こうしているときだって「出て行け」とは言わないんだ。

僕の言い分を聞いたレーヴィ様は、自分のなかで冷静に答えを出すそうとしてる。自分のなかで、最大限譲歩できる答えを模索してる。

僕は待った。

次の言葉が、レーヴィ様の答えだから。

「私は――」

僕はどきりとして息を飲んでた。けれどすぐに気持ちを落ち着けて、一つ頷いてみせる。

「悪魔が嫌いというわけじゃない。……ただ魔導師と悪魔の關係が許せないだけだ」

うー……。

腕の中の小悪魔が唸る。

「ああ、お前は私を選ばなかった。それは後にも先にも賢明な判断だと思え。私とてお前と契約を結ぶつもりはない」

ぷ！

パチンと音がしたあとでレーヴィ様の髪がわずかに跳ねて、毛先がはらはらと床に落ちていった。え？ と、僕は驚いたけど、一人と一匹の間にある険悪な空気は変わらない。

「リオ」

「は、はい！」

「お前は師タウトから預かった者だ。もしお前を追い出したら私は罰を受けることになる」

「タウトさんはそんなことしませんっ」

「私がこのさきカツとなつて「出て行け」と言つても、お前は突っぱねろ。例え私がこの屋敷の主だろうと、師タウトの命令は絶対だ」

「そ、それじゃあまるで僕が、タウトさんを傘に居座るみたいじゃないですか！　僕はレーヴィ・エルヴァステイ様を「ご主人様」と決めたんです！　ご主人様が出て行けと言つたら、僕は出て行くしかありません！」

「だつたら金輪際、出て行くのはやめろ」

ご主人様は不機嫌な表情のまま、無愛想にそう言つた。

「……え？」

「言葉には魂が宿る。魔導師の言葉は特に」

ご主人様は細く長い息を吐き、宙にゆっくりと何かを描いていく。そして、ふう——と、腹から太く一息出したご主人様は、僕をまっすぐに見詰めると

「お前がいる場所はここだ」

——と、ご主人様は自分の胸を指差した。

「……………それって……………」

それって……………。

まるで。

「ご主人様……………」

まるで——ご主人様の胸が僕の居場所みたいじゃないか。

僕はトランクを床に置いて、涙に濡れた頬を拭っていた。そしてにつこり笑うと、ご主人様は不機嫌そうに口をへの字にしよう。

「だがそいつは嫌いだ。飼うなら私の目の届かないところにしろ！」

ビツと小悪魔を指差して冷たく言いはなつたご主人様に、小悪魔も「ぷー！」っとほっぺを膨らませて応戦してる。僕はそんな一人と一匹を見て呆れながらも笑っていた。

「ありがとうございます、ご主人様！」

僕のわがままを聞いてくれて！

また一人の（一匹の）同居人を増やす許可を与えてくれて！

「ありがとうございます！」

「うるさいっ、礼は一度でいい！」

「はい！」

ありがとうございます！

僕は大きく元気な声で、玄関ホールに響き渡る声で三度目のお礼を言っていた。

10・赤ん坊の名前、決めました！

「おいおい……なんか予定と違わねーか？　どうするよ、アリー」

「知らんつ。そもそも私に聞かれても困る」

背後からヨーナに覆い被さられたアルトリートは、肘で脇腹を突くと小声で鋭く返事した。今、玄関ホールではレーヴィとリオが二人であれやこれやと話をしていて、それを二人は廊下の角に隠れながら見ているのだが、その表情はひどく苦しい。

「なあ、アリー」

わざとらしく芝居がかった、ヨーナのしょんぼり声だ。

「俺とアリーの問題だろうが。一緒に解決していこうぜ」

「気色の悪いことを言うな。これでは予定と違うではないか。なぜ厨房に卵なんか」

「ほら、レーヴィが俺たちを捕縛しようとして蛇の術を使っただろ？　きつとあれだ。蛇が籐の籠を引っ掛けちまったんだろうな。その反動で、ころころころ……」

「それでリオが親になってしまったなんて……これだからお前と一緒は嫌だったんだ。碌なことが起きない」

「そうか？ 俺は毎日楽しいけどねえ」

呑気に言い返したヨーナに、アルトリートは怨念を込めて睨む。
時々本気で殺意を露わにする相棒は、振り返った拍子に乱れた黒髪を耳に掛け、再び不本意な状況を凝視した。

「ヨーナ、考えはあるのか？ このままでは困るぞ」

「まだ諦めるなつて。どう見たつてあの黒髪はレヴィに懐かねえし、
だったらとことんリオちゃんと仲良くなつてもらうしかねーだろ？
遣り様はあるぜ」

「……リオを巻き込むのか？」

濡れ羽色の瞳に途惑いと困惑の色が滲んで、アルトリートの表情
が自然と硬くなる。見蕩れるような美人顔を堪能するヨーナの態度
は、あっけらかんとしたものだ。

「あれ見ろよ。レヴィはリオちゃんに対してそんなに悪い感情は思
つちやいないぜ？ 利用するなら丁度いいだろ？ 悪魔は黒髪じゃ
なくたつて他にもいる」

「そうだが……リオはまだ若いし、そもそも異国人だ」

「異国人がなんだよ。異国人は悪魔と契約出来ないってルールはな
いだろ？ あの黒髪がリオちゃんを気に入った以上、作戦は続行す
る」

しかしアルトリートの返事無く、長い睫毛の先はリオに向けら

れている。涙を拭いたあとで満面の笑顔になったリオは、まだ十代の若者だ。

「アリー」

艶やかな黒髪の間隙にのぞく耳に囁くと、アルトリートはびっくりと肩を弾ませて、その瞬間肘鉄を喰らわせた。腹に深く決まったヨナは「う！」と短い口気を洩らして、たらし顔を赤くしたり青くしたりしている。

「今度私の耳元で囁いたら、貴様の内臓を引き摺り出して犬の餌にしてやるから、そのつもりでいろ」

「俺は何度殺されたって、アリーののためなら生き返る男だぜ？」

「ああそうか。それは面倒な体質だな、気の毒に」

アリーは素っ気なく返事して、すらりときびすをかえした。

「リオが来る。厨房へ戻るぞ」

さらりと波打った黒髪に、垂れた目尻を尚も下げながら見蕩れたヨナは頷いて、二人は早足で厨房へと戻る。

「アリー、私情は挟むなよ」

「お前に言われるまでもない」

「あと、酒は飲むなよ」

「お前の前ではな」

間もなくして、さっぱりとした顔のリオが厨房へやってきた。まるで憑き物が取れたようなリオの明るい表情に、アルトリートもヨナも自然と笑顔になった。

「僕、ここにいても大丈夫になりました！」

「つたりめーだろ！　よかったなあ、リオちゃん！」

「はい！」

両手を広げて待ち構えたヨナの胸に、リオは無防備にも飛び込んだ。

ち！　と黒髪の小悪魔が怒った声を出したが、ヨナはリオの頭をわしゃわしゃと掻き回して大喜びしていた。その様子はアルトリートに「私情を挟むな」と言った奴の態度とは到底思えない。

（お前こそ、私情を挟んでいないか……？）

という愚知は胸にひそめて、アルトリートはリオから変態を引き離す。放っておいたら首筋にキスマークでも付ける勢いなのだ。幼さが残る若者の操をさりげなく守ったアルトリートは、ちいちいと煩い小悪魔の首根っこをつまんで、リオの前に突きつけた。

「感動の再会はあとにして、この子を風呂に入れてはどうだ？」

ぷー！

少しの時間育ての親に相手にされなかった小悪魔は、御冠のご様子だ。しかも卵から生まれたばかりで全身がべたべたしていた。

* * *

「すつ、すいません！ 嬉しくつてつい……」

ぷー！ ぷー！ と、怒っている様子の赤ん坊を受け取ると、赤ん坊は僕の腕をもぞもぞと伝いながら最終的に肩の上にちょこんと腰を下ろした。僕の髪の毛に捕まって、うー！ っと、なにやら急かしてる。

「待ってて、すぐに身体洗おうね！ おなか空いてる？」

ち！

すいてるみたい。わ！ 忙しいぞ！

「俺も何かしようか？」

ヨーナさんが僕のつむじをつんつんと突くと、ちち！ っと、赤ん坊がまた怒り出す。そのあとで僕の頬にぺちゅと飛びついてきた。

「いらいら。危ないよ」

僕が苦笑まじりに引き剥がすと、両手足をばたばたさせながらちいちいと泣きだした。

悪魔って顔に飛びつくのが好きなのかな？ それにしても本当に不思議な生き物だね。さっきまで笑ったと思えば、急に怒ったり泣いたり。

赤ん坊ってそうなのかな？ 僕にとっては新鮮なことばかりだ。

奥様にはお子さんがいなかったから、僕が本当の子供みたいに良くしてもらっていたんだ。奉公先では仕事のほかに読み書きの勉強もさせてもらったし、本もたくさん読ませてもらった。

僕が親になった以上は、この子にいろんなことを教えてあげなくちゃいけないんだよね。でも、とにかくお風呂が先だ！ 裸のままじゃいけないものね！

ひとまず大急ぎで桶にぬるま湯をつくり、黒髪の元気な赤ん坊をそつと湯の中へと入れてみた。

赤ん坊は「きゃっ！」と声を上げて僕の腕にしがみついたけど、最後には気持ちよさそうに湯の中で笑顔になっていた。それから身体を布巾で洗ってあげたまではいいけど、小さな赤ん坊に着せる洋服なんて持っていない。

少し考えた僕はトランクの中から綿のハンカチを出し、切り込みを入れただけの簡単なワンピースを作ってみた。赤ん坊は男の子だけど、今だけごめんね。あとでちゃんとしたものを作ってあげるよ。

こう見えても裁縫は得意なんだ。今着ている僕の服だって、貰い

物を自分で裾治したくらいだからね。

身体を洗い終えたあとで即席ワンピースを着替えさせると……なんだか照る照る坊主みたいだ。でもかわいい。

「よく似合ってるぞ」

ヨーナがにやにやしながら誉めると、赤ん坊は「ぷ！」と口を尖らせた。男の子にワンピースは嫌かな。

「ひとまずこれで、我慢してね」

ちい。

本当に一時凌ぎの服なのに、赤ん坊は今までのなかで一番嬉しそうな顔をして、ふっくらほっぺを濃い桃色に染めていた。

可愛さについつい惹かれて頭を撫でる僕の手を、赤ん坊は掴まえようと手を伸ばしてる。人差し指を出すと、蕩けるような顔でほおずりしてきた。

「不思議ですね。悪魔じゃなくて天使みたいなのに、この国では悪魔なんですよね。どうしてですか？」

「人には良い面と悪い面が必ずあるだろう？ 悪魔にも必ずあるということだ」

「それって……」

「あーっ、待て待て。アリーの説明じゃ小さなことでも深刻に聞こ

えちまうから、俺が言う」

隣でアルトリートがむっとして細い顎を逸らした。相棒の様子に気付いてヨーナはまズった顔をしたけれど、すぐに気を取り直して腕を組む。

「悪魔つてのは人の体液を飲むんだ」

「え！ 吸血鬼ですか！？」

「なんだそりゃ。悪魔は悪魔で、血や唾液や涙がこいつらのご馳走だ。けどな、俺たちと同じように普通の飯も食えるし、ちょっとばかり力が強くて空が飛べるくらいで、基本は俺たち人と大してかわらない」

「空が飛べるんですか？ この子もですか？ 本当にですか？」

腕の中にちゃんと収まる赤ん坊が空を飛べるの？ 本当に？

僕は次々と入ってくる情報に驚いて、眼鏡がずれたことにも気付かない。

奥様。僕は今、本当に、本当にとんでもない世界に来てしまったのかもしれない！

乗る船をすっかり間違つて、このまん丸の国へ来てしまいました。が、ここには真正銘の魔法使いがいて、悪魔と呼ばれる空を飛べる（かもしれない）小人までいるんです。

「あの！ も、もしかして龍とか巨大生物とかもいるんですか！」

「いるわけないだろ。おとぎ話の国じゃねーんだから」

ヨーナは苦笑するけど、僕は九割近くいることを期待していた。

現地の人が当たり前前に思っていることでも、異国の人の目から見たら不思議なことだった——なんて事實は、奥様と冒険してきてこれまでたくさんあったから、きつと何かあるんだ。

ああどうしよう！

僕は今、不思議な世界で、小さな小さな冒険をしようとしています！ その証拠に目の前に「悪魔」と呼ばれる「小人」までいるんだから。

ぷ！

悪魔の赤ん坊はにつこり笑って、僕の腕をよじ登る。もしや……もしやと思ったら、顔にぺちゃ！

ちー！

大喜びで僕の頬に頬ずりしてきた赤ん坊に、僕は注意する気も失せちゃった。両手の手の平で抱えてやると、紫色の瞳をきらきらさせながら僕を見上げてくる。

うー！

赤ん坊は口を尖らせながら両手を挙げた。

「リオちゃん、こいつに名前つけてやらねーの？」

ヨーナさんがパンを摘み食いしながら、テーブルに腰掛けた。

「名前……ですか。そっか、僕が親になったからには名前をつけな
いとでもんね」

本当はご主人様に付けて欲しかったな……とか思ったりしたけれ
ど、絶対に無理だよな。

「ご主人様と仲良くなって欲しいんだけどなあ……」

僕にはよくわからないけれど、魔法使い様と悪魔の間には何か確
執みないなものがあるらしい。でもこの子は新しい家族になったん
だもの、いつかちゃんと仲良しになってもらわないとね。

さあ、名前だ！

名前、名前……名前かあ……。

誰かに名前を付けるなんてはじめての経験だった。この子の今後
の人生を左右する大事な場面って考えたら、下手な名前は付けられ
ない。

ちっちゃな悪魔の赤ん坊は、これからどんどん大きく成長して、
たくさん友達を作るんだ。お勉強をして、いろんな経験をして、
少しずつ大人になっていく。

ああ、この子はどんな人生を歩むんだろう。

僕は生まれたときから奉公人になることが決まっていた。

そして奥様のお屋敷に奉公へ行つたのは七歳のころだ。

大家族の末っ子だった僕は、生まれたときから近所で一番立派なお屋敷へ奉公で出されるのが親同士の約束だったんだ。口減らし——なんて言う人もいたけれど、本当は子供のいない奥様のお相手をするため。

赤ん坊のころからお屋敷に頻繁に出入りしていた僕は、本当のお母さんも奥様も、どっちも大好きなんだ。

「あ」

大好きって言ったら、隣の家の子なじみも僕の大好きの一つだった。

悪戯っ子でいつも元気なあの子の名前は——。

ミュリ

ぼさぼさの黒髪を弾ませながら遊ぶミュリとは、かけっこしたし、木登りもした。いっぱい笑って、ケンカして泣いて。でも次の日にはいつも仲直りしたんだ。だって、僕たちは大親友だから。

「ミュリ」

これから僕は君の育ての親になるわけだけど、でも本当は大親友になりたいんだ。黒髪の幼なじみのようにたくさん笑って、ケンカして、そうやって毎日毎日一緒にすごしたいんだ。

「決めた！ 君の名前はミュリだよ」

ち！ ちー！

「わ！」

大喜びしたミュリが、ぺちゃっと顔に飛びついた。そして満面の顔で頬ずりして、足をバタバタさせている。

「悪魔って、顔に飛びつくのが好きなんですか？」

ミュリを引き剥がした僕は、眼鏡を直しながら二人に尋ねた。

「いいや。こいつだけだ」

「ああ、妙な癖のある子だ」

あきれ顔の二人に、ミュリは、ぷ！ と頬を膨らませたが、すぐに笑顔になって僕の手にはおずりしてる。きつとこの子が一番嬉しいときに見せる癖なのかもしれない。

「よろしくね、ミュリ」

ち！

よろしく！

元気にそう言っている気がして、僕まで笑顔になっていた。

「さ！ ご主人様のお食事をご用意なくちゃ！ それからミユリのもね！」

「俺たちのも！」

ヨーナが手を上げ、僕は元気に頷いた。遅い遅い朝食のはじまりだ。

「その前に食材の買い出しをしたほうがいいのではないか？ 何も無いぞ」

殺風景な厨房をぐるり見るアルトリートに、僕も買い出しのことを思い出した。

急がなくっちゃ、時刻はもうお昼に迫っていたのだった。

11・黒髪の悪魔の子

昼食の時間を目前にして、市場はすこぶる活気付いていた。

「はぐれるなよ、リオ」

「は、はいっ」

アルトリートに先導してもらいながら、僕はどうにかこうにか後ろを付いていく。

それにしても、天幕のアーケードが延々と続く市場は、いつ来ても魅力的だ。あちらこちらからいい香りがして、つつい視線が行きがちだから、うつかりするとアルトリートを見失ってしまいそうになる。そのたびに彼は足を止めて、僕が追い付くまで待ってくれていた。

「すごい賑わいですねえ。毎日こうなんですか？」

「ああ。買い出しといえばここだから、自然と人が集まる」

と、話をしている間も、追い越す人が僕の肩にぶつかっていくが、アルトリートは器用に除けて涼しい顔だ。

「市場にはスリやひったくりをする悪い連中も多いから、気をつけろ。慣れるまでは誰かと一緒に来たほうがいい」

「はい」

頷く僕に、アルトリートは手を差し伸べてくれた。不慣れな僕を
気遣ってくれる優しさに微笑んで、そつと握り返してみた。

わ！ 手を繋いで歩くなんて、なんだかちよつと照れ臭い。とい
うか、僕、子供扱いされてる？

でもいいや！ 手を繋いで冒険している気分だもの。

「まずは何を買うのだ？」

「野菜です！ あと果物も」

「ミユリの服は？」

「着ていない服を使って僕が縫うつもりです」

「リオは裁縫も得意なのか」

「はい！」

ち！

名前を呼ばれたと思ったのか、ミユリは僕の頭の上で大きく一鳴
きした。僕が上を見ると、なぜか額をぺちんと叩かれる。

「ミユリ、ちゃんと掴まっているんだぞ」

僕が言う前にアルトリートが言った。

ミュリは「ぷ！」と、大きく返事して、僕の髪の毛をぎゅっと手綱のように握り締めている。いたた……こらこら、髪が抜けちゃうよ。

「ミュリは何が食べたい？」

ぷー！

「なに？」

うー！

「うん。何を言っているか全然わからないなあ」

「レーヴィがいたらよかったな」

アルトリートも困惑気味にミュリを見ていたが、僕はその言葉のほうに気になった。

「どうして、ご主人様なんですか？」

「魔導師は悪魔の言葉がわかるのだ」

「え！ ほ、本当ですか！」

ぷ！

ミュリが頭から肩へと落ちてきた。驚く僕を不思議そうに凝視したあとで、ちゅっと頬にキスしてくれた。

「ミュリはご主人様とお話しが出来るの？」

うう。

途端に可愛い顔が険しくなつて、そっぽを向いてしまったではないか。本当に仲が悪いんだ。困りものだよ。

「言葉がわかつて、仲が悪くてはな」

「ご主人様は、魔法使いと悪魔の関係が許せないと言っていました。アルトリートさんはその意味がわかりますか？」

「——さあ」

アルトリートは少し考えたあとで、短く返事した。

「ご主人様は偉い魔法使い様なのですよね？ 昨日、玄関ホールにご主人様を置いて行った人たちは、お弟子さんかなにかですか？」

「部下だろうな」

部下。

それじゃあよくわからないし、色々知りたい僕としては、どこから聞いたらいいのか少し悩んでしまう。あぐねる僕の空気を察したのか、アルトリートは歩く速度を緩めて、隣に並んでいた。

「レーヴィはこの国で尊ぶべき重要人物で、「老」と言われる役職に就いている。この国の民なら誰でも知っていることだ」

「ご主人様はまだお若いですよ？」

「まあそうだが」

アルトリートは白皙の美貌に微笑を浮かべ、艶やかな黒髪を耳にかけた。

「彼が老に選ばれた理由は、年齢ではなく才能だろう。魔導師の始祖となるアストラ直系の弟子ともなれば、彼の箔がどれほど大きなものか……と、言っても異国人のリオにはわかりづらいだろうが」

「すみません。……でもエリート中のエリートってことなんですよね？」

アルトリートは頷いた。

「彼は、アストラ、イーオ、そしてタウトの三人の偉大なる師を持ち、魔導師の誰よりも多くの術を使いこなすという。言わば、魔導師の教本のような男だな。——性格に多少の難はあるが」

「少しだけ気難しいだけですよ」

僕は笑った。

「まだお若いのに、たくさんの魔法が使えるから重要な役職に就いているってことなんですな」

「ああ。尊敬に値する男だ」

「今、性格に難ありって言ったばかりなのにですか？」

「仕事と私生活は別ということだな。私生活の彼は目も当てられない。あの馬鹿と同種だ」

アルトリートは美しい貌を険悪気味に歪めたが、でも本心はヨーナのことが好きなのかもしれない——と、僕は思っている。本当に嫌いな人なら、一緒になんて暮らせないよ。多分。

だからきつとアルトリートはヨーナが好きなんだ。僕は勝手にそう思うことに決めた。

「いい魔法使い様なら、きつとミユリのことも好きになってくれますよね」

僕にとって大事な問題はそこなんだ。

魔法使いと悪魔の間に何があるかは知らないけれど、ご主人様とミユリは仲良しになってほしいと思っている。

「レーヴィは気難しい男だ」

その声が、予想以上に苦々しいもので、僕はうつとなった。

なんだか僕の言葉を返された気がして、少しだけ気持ちが暗くなる。けれどそれも賑やかな客引きの声に掻き消されて、市場の景色は野菜一色になっていた。

「野菜売場だ」

「はい！」

まん丸な形をしたこの国の市場は、国じゅうの野菜という野菜が一同に集結したくらい、どの店もすごいボリュームだ。棚は野菜の壁のようだし、天幕の支柱にも乾物が簾のようにつり下がっているし、原色の果実に眼ががちかかしそうだ。

貧富の差関係なく、人々はここで食料を買っていく。まさにこの国の台所だ！ 僕も一気にテンションアップしていた。

この国へ来て三ヶ月と日も浅いけど、この市場のすごさは何度訪れても感動するんだ。

僕とアルトリートはさっそく新鮮な野菜を吟味しはじめる。けれど、

ぷ！

ミュリがぺちんと頬を叩いて、真っ赤なリンゴを指差した。

うーうー！

「リンゴが食べたいの？」

ミュリは黒髪を大きく弾ませて、一つ頷いた。そのあとで、買って、買ってとおねだりするように、僕の頬にほおずりをしてくる。

「いいよ、じゃあどれにしようかな？」

ち！

手を出す前に、ミユリは僕の肩からふわりと飛んで、とびきり真っ赤なリンゴの上にぺちやりと落ちた。

「わあ……本当に飛べるんですね！」

僕は目を輝かせた。

「さっき、ミユリと意思疎通ができていたみたいです」

「悪魔は人語を理解するからな」

「そうなんですか！ でもちゃんと会話ができたらいいですね。ご主人様は魔法使いだからお話しできるんですか？」

「まあ、そんなところだ。修行の賜物だろう」

「そうなんですか！ 一体どんな修行をするんだろう」

でも、ご主人様がここにいらなくても、僕はミユリとちゃんとお話してきたみたいだ。僕は少しだけ「親」としての自信を持った。

「黒髪の悪魔なんて珍しいねえ」

リンゴ売りの老婆が皺だらけの目尻を垂らしながら、ミユリの頭を撫でてくれた。ミユリはにっこり笑って、ち！ と、鳴いている。

「かわいいねえ。黒髪なんて、あたしゃ、はじめて見るよ」

「あーら、時々見掛けるじゃないのさ」

隣の老女がオレンジの皮を剥きながら、話に入ってきた。

「紫の目をした、きれいな悪魔だよ」

「そうかい？」

「あんた、ちょっと前にうつとり見蕩れてたじゃないかあ」

「他の黒髪の子が時々来るんですか？」

僕が尋ねると、花柄のスクarfをほおかむりした老女が笑顔で頷いた。

「ああ、あんたみたいな茶色の髪にまん丸の眼鏡を掛けた人と一緒に時々ね。金髪の悪魔の子とも来ることがあるよ」

「へへ。悪魔っていっぱいいるんですねえ！」

「いっぱいはいないさ。まあ、あたしらが若いころよりは、少し増えたような気もするけどねえ……でも悪魔は今でも貴重だよ。ほら、ヒマワリの種食べるかい？」

ぶふ！

ミユリは小さなヒマワリの種を大喜びでもらって、さっそく齧り付いた。

チチ！

「おっとつと。殻を剥いてあげないとねえ。ごめんね」

野菜売りの老婆は二人でにこにこしながら、ミユリにヒマワリの種の殻を剥くと、一つ、また一つと手渡した。ミユリはほっぺたを真っ赤にしながら食べていく。

「悪魔って、ヒマワリの種が好きなんですネ。僕も子どものころによく食べたなあ」

「悪魔はなんだって食べるよ。ヒマワリの種はおやつにいいんだよ。栄養もいっぱいあるしね」

「そうなんですか。じゃあ、ヒマワリの種とリンゴをください。ミユリ、どのリンゴがいいか選んで」

ち！

任せて！ と、ミユリは威勢よく立ち上がって、老女に向かって指差していく。老女はいはいと頷いて、持参した買い物袋に入れてくれた。

ついでにたっぷりおまけしてもらって、僕まで上機嫌だ。ミユリを連れて行くとおまけが期待できるかもね！

「そういえばアルトリートさんも、黒髪の悪魔のことを話していましたよね？ おばあさんたちが言っていた悪魔って、その子のことなんでしょうか？」

「そうかもしれないな。黒髪なんて貴重種もいいところだから、きつと目立つだろう」

「その黒髪の子も、人間の保護者がいるんですか？」

「ああ、街に住んでいるなら、いるかもしれない」

「ふうん。……僕みたいな眼鏡の人かあ……」

茶色の髪に、まん丸の眼鏡の人。

そんなことを言われると、あの人のことを思い出しちゃうな。そういえばあの人もきれいな黒髪の恋人がいたし……。

うーん。

まさかね！

新鮮な野菜を次々と買い込みながら露天を散策していた僕たちの前に、揚げ物の香ばしい匂いがやってきた。

「あ、いい匂い」

なんて僕が呟いた途端、ミユリが、ちー！　ちーー！！　と、大きな声を出して、ふよふよと香りに釣られて飛んでいく。

「ミユリッ」

こ、こら！　ただでさえ人通りが多いのに、はぐれたら危ないよ

！ 僕とアルトリートは人を掻き分けながら、通行人の頭上を飛ぶミュリを追いかける。

「リオ、目を離すな！ 悪魔を誘拐して売りさばく連中もいるのだ！」

「は、はい！」

そんな恐ろしいこと絶対にさせるものか！

「ミュリ！ 待って！」

必死に叫ぶ僕の声にもミュリは振り返らない。頭上で飛ぶ悪魔に気付いた人たちが、次々と指差して、黒髪だ、と驚いている。中には捕まえようとして手を伸ばす人もいたが、ミュリはひらりと交わして匂いの方へとまた誘われていった。

人々の奇異な視線に、黒髪の貴重性がなんだかわかった気がした。放っておいたら危ない。本当に誘拐されてしまうかもしれない。

「ミュリ！」

僕は叫んだ。

やっと人混みを抜けたそのとき、

「わぁ……！！！」

油鍋に飛び込もうとしていたミユリを、僕は寸前でキャッチしていた。

12・途惑いのご主人様

なにをしているんだ。

「私は一体、何をしているんだ……」

リオを呼び止めたあとで寝室に独りこもったレーヴィは、窓辺の肘掛け椅子に腰掛けて、盛大に頭を抱えていた。

頭の中は激しい羞恥と困惑がこれでもかと暴れ狂っていて、眠ろうにも眠れない。その理由は言うまでもなく、リオだ。あの小間使いの存在がレーヴィに様々なことを突きつけて、ひどく混乱させていた。

一つ目の問題はヨーナとアルトリートなる二人の男だ。

正体も知れぬ連中を「家が無いから」という、ただそれだけの理由で居候させることになってしまった。リオさえいなければ、今すぐ叩き出しているところなのに、完全に調子が狂ってしまった。

二つ目はあの黒髪の悪魔だ。

「あいつら……ッ」

思い出した途端に、椅子が軋むような悲鳴を上げて、レーヴィは我に返った。

怒りのせいで力が暴走するなんてことは滅多に起きないが、それが簡単に起きてしまうほど、あのときは感情が昂っていた。今も椅子を木端微塵にしてしまいそうになって、レーヴィは慌てて息を吐く。

二度、三度と深呼吸すると、椅子は悲鳴を止めて再び沈黙して、レーヴィは静かに安堵していた。

「悪魔の卵など……よくも持って来たものだ」

長い足を組み、モノクロの斑髪を掻き上げたレーヴィは、うつそうと茂った庭の木々を眺め見る。仕事にかまけて手入れを怠って久しい樹木は、広大な敷地のなかにも関わらず窮屈そうだ。

（文句を言われるな……）

庭じゅうの木々が腹を立てているのが、風の流れて強く感じられた。このまま庭を放置していたら、いざというとき痛い目に合う。

しかし……。

（眠い）

レーヴィは椅子から立ち上がり、ベッドに倒れていた。

目蓋を閉じるなり、リオの笑顔が思い出されていく。

リオの笑顔は美味そうだ。真っ白なパンにごまを振り掛けたような、すこぶる美味そうな笑顔につられて、レーヴィまで微笑んでいた。

「おい！」

はたと我に返って顔だけ持ち上げたレーヴィは、自分の妄想に小さく腹を立てていた。すると訪れたばかりの眠気がまた引いて、自然と目が冴える。

（またか……）

今日だけで一体なんど繰り返しただろうか。

せつかくの休日だから、寝るだけ寝て、寛ぐだけ寛いでいたのに、それさえままならない。

レーヴィは強引に目蓋を閉じて、眠る努力をしてみた。

——だが、

（……なんであんな術を……）

ぼつりと思ったレーヴィは、三つ目の問題に頭を抱えていた。

「なぜ、あんなことを……馬鹿か！ 私は馬鹿なのか！」

カッとなり、つい「出て行け！」と言ってしまったレーヴィに対して、リオは食い下がるかと思いきや、すんなりと身を引いていた。

二人には家を、悪魔には親を。——なんて、そんなことを自然と思いつくあの子は、一体どれだけ優しいんだろう。

（私が呼び止めなかったら、一体どうするもりだったのだ）

水際で呼び止めてはいたが、レーヴィの足はぎりぎりまで動けなかった。それも二人に「行け！」と凄まれて、渋々の行動だったのだ。

「……………それであの術だ……………」

馬鹿か。

と、レーヴィは赤らむ頬を枕に押し付けた。

あのときリオにかけた術は、昔の魔導師が、好いた人を振り向かせるための「恋のおまじない」として人々に教え伝えたものだ。

力のない者が使用したところで効果は無いが、素質があるなら多少は効果があったりするし、魔導師が使えば——強い力を持つ魔導師が使ったらどうなるか想像は容易い。

そんな術を咄嗟に使ってしまった自分に、レーヴィは気恥ずかさに身悶えしながら、ひどく困惑していた。

（……………単に出て行かれては困ると思っただけだ）

リオを追い出したことが師タウトにバレたら後が面倒だし。師のことだから、会うたびにねちねちと文句を言うに決まっているし。

それにしてもなぜリオは、タウトと出会ったのだろうか？

師からの手紙の中には数日面倒を見ていたとあったが、あの師が、

自分の家に若い男を住まわせるなんて、よほどのことが無ければあり得ない。

（確かにリオは可愛いが……）

「か！」

か・わ・い・い・と・か、思うな！！

無意識とはいえ、自分の行動が心底忌む。

なにが「可愛い」だ。なにが「美味そう」だ。何かにつけて小煩い小間使いに、一級魔導師が翻弄されるなどあり得ない！

「結びの術だって、単に出で行かれては困ると思っただけだ！」

自分の胸に結び目を作ったのは、レーヴィがこの屋敷にいつまでもいる確証が無かっただけのこと。自分の胸にしておけば、リオはいつまでもレーヴィの元にいる。

いつまでも。

「——ッ」

レーヴィは飛び起きて、自分の行動に絶句していた。

それではまるで、遠巻きに求婚しているようなものではないか！
遠巻きどころではない。これはストレートな求婚だ。

「違う！ 私は断じてそんなつもりじゃ……！」

単にどこへも行つて欲しくなかったただけだ。

出会つたまで少しの時間だが、あの子の笑顔がすこぶる愛くるしいものだということを、レーヴィは知っている。その笑顔がもう見られなくなると思つたら、世界が色褪せてしまいそんな気がして――。

「違う！ 私は馬鹿か！」

レーヴィは頭を掻き篁り、再び枕に突つ伏した。

（よく考える……反射的とは言え、術を掛けたのは私だ。それは認めろ、レーヴィ）

単に出て行かれては困ると思つただけのことだし、正直言えばわざわざ術を掛けるまでもなかった。――またカツとなって「出て行け」と言つたら、また同じことを繰り返しそうな気がしたし、二度手間は嫌だった。

（ああ、そうだ。それだけだ）

様子を見て、いずれ解術しよう。——いいや、こんなことでごちやごちやと悩むくらいなら、今すぐにでも解術するべきだ。

レーヴィはまた顔を擡げると、決意したように上体を起こした。リオに気付かれないように解術してしまえば、それでいい。

そうと決まるとレーヴィの行動は早かった。しかしキッチンにはリオの姿どころか誰もいなく、耳を澄まして気配を探ったが、悪魔の小煩い鳴き声も聞こえてこなかった。

「いないのか？」

せっかくの決意が拍子抜けだ。

レーヴィは安堵のような落胆のような曖昧な吐息を零したあとで、一階の図書室の扉を開いた。

「——っ」

誰もいないと思っていた図書室には、金髪の男ヨーナ・イコラが長い足を投げ出して、長椅子に横たわっていた。

「こりゃ、失礼」

レーヴィの登場に気付いた男は読みかけの本を閉じ、さっと起き上がる。読みかけの本を素早く戻した男は、

「どうぞ」ゆっくり

と、一礼して、レーヴィは眼を細めた。

垂らし顔の見本のような顔の男は、一つ一つの仕種が妙に胡散臭く、自然と警戒心が強くなる。

「リオはどうした？」

「アリーと市場へ行ってるよ」

「市場へ？——まだ食費を渡していないのに」

「アリーが立て替えてるんじゃないの？」

主人として早速の失態だ。渋面をつくるレーヴィにヨーナはあっけらかんとしていた。

「これから買い物へ行くときは私を通せと、お前の連れに言っておけ」

はいはい。

適当な返事をしたヨーナが脇を抜けていく。それを横目で見ていたレーヴィは、短い呼気とともに素早く印を切った。

「ッ」

髪を一房切る程度の小さなかまいたちが、ヨーナの顔目掛けて飛びかかる。だが触れる寸前、かまいたちはパチンと弾けて無に帰した。

「ちよっ、なんだよ！俺に何かしたな！」

途端に驚き顔で後ずさったヨーナに、レーヴィは尚も警戒色を強くした。

「お前が読んでいたのは魔導書だ」

「それがどうした。画家が魔導師の本を読んじゃ悪いってルールはないと思うぜ？」

「ああ。ただし読めればの話だ」

「なんだよ……読んだら死ぬとか、そういう呪いはマジで勘弁してくれよ」

「魔導術を会得していない者に、ここの書物は開けぬようになってる。——お前は本を開いたな」

好戦的に、かつ冷ややかに微笑むレーヴィを前に、ヨーナはやらかしたという顔で青い眼を細めていた。そして苦々しい表情へと変化した垂らし顔の男は、応戦するように金糸の髪を掻き上げる。

「今更ごまかしはきかないぞ。この国で私の名を知らない者はいない。その屋敷に忍び込み、平然としているおまえたちは何者だ」

ヨーナは無言のまま、息を吐いた。

「私に見付かればどうなるか想像に容易かったはずだ。あるとき逃げもしないで屋敷に止まり続けた理由はなんだ。言え！」

「だから、家が無かったんだって」

「そんな誤魔化しがいつまでも通ると思うか。貴様、ヨーナと言っ
たな」

金の髪の男は返事をしなかったが、レーヴィは続ける。

「その名は魔導師ヨウに通じるものだ」

しかしレーヴィに、ヨーナなどという名に覚えはない。

魔導師ヨウは師イーオと旧知の仲だが、仮にもしヨーナがヨウに
通じる者ならば、レーヴィと対立する理由は無い。

「たとえ魔導師ヨウに通じる者だとしても、私の屋敷に許しもなく
忍び込み、素人を誤魔化している時点で不審人物であることは変わ
りない。言え、何者だ！」

「だ〜から〜、ただの画家だってば」

ヨーナは苦笑いしながら、波打つ髪を困り顔で掻いた。

「魔導術って、先祖に魔導師がいたら、少しは使えたりするもんだ
ろ？ 俺の爺様の爺様の爺様が魔導師で、うちの血筋は代々魔導術
的なものが時々使えたりするわけさ。つまりそういうこと！」

「ああ、そうか」

レーヴィはすげなく返事して、捕縛の印を切った。

「——ッ」

その瞬間、ヨーナが楯の印で弾き返す。レーヴィが放った術は衝撃音とともに跳ね返り、レーヴィ目掛けて投網のように広がりながら襲ってきた。

「おのれ……ッ」

シッ！ と、息を切り、飲み込まれる前にレーヴィが解術する。術が消えて部屋は何事もなかったように静まり返ったが、二人の間に殺気が渦巻いていた。

「なるほど。大した血筋だな。楯の印まで使えるのか」

「偶然だよ、偶然？ あれ、楯の印って言うのか？ さっき書物に書いてあったけど？」

「あの本に楯の印は載っていない」

「あれゝ。そうか、そうだったっけ？ じゃあ、先日読んだ本かな？ って、さすが偉い魔導師様だ。本の内容をよく覚えてんなア」

「とことんしらばつくれる気がッ。それならばいいだろう。貴様を捕縛して、その力を封じるまでだ！」

「ちょッ、待てよ！」

ヨーナが青ざめながら後ずさったそのとき、彼の背後にリオの姿を見た。

「ッ」

レーヴィは印を書く手を途中で止めて、驚きに大きく見開かれた瞳を凝視していた。

いつの間に帰って来たのだ。しかもタイミングが悪い。

（これでは私が一方的にあいつを苛めているようなものではないか……！）

内心焦りを見せるレーヴィの前に、茶色した愛くるしいリオの瞳は戸惑うように揺れ動いていた。

13・疑惑のご主人様

市場で食材をしこたま買い込んだ僕たちが厨房へ戻ってくると、一階のどこかの部屋でご主人様の尖り声がしていた。

「どうしたんでしょう……まさかヨーナさんとケンカしているんじゃない……」

途端に僕は小さく狼狽える。

「放っておけ」

「でも……」

アルトリートは素っ気ないけれど、ぴりぴりとした空気に僕の心配は大きくなっていく。厨房で様子を窺うだけじゃ我慢ができなくなった僕は、ミユリを抱きしめながら声のするほうへと歩いていた。

『あれ……。そうか、そうだったっけ？　じゃあ、先日読んだ本かな？　って、さすが偉い魔導師様だ。本の内容をよく覚えてんなア』

ヨーナの呑気な声が図書室のほうからする。呑気な口調に安堵しかけたとき、ご主人様の怒り口調に体の芯が強張った。

『とことんしらばつくれる気かつ。それならいいだろう。貴様を捕縛して、その力を封じるまでだ！』

ああ！　やっぱりケンカをしているんだ！　焦った僕が図書室の扉を開けたそのとき、

「ちょッ、待てよ!」

ヨーナの引き攣った声を前に、ご主人様が魔法を唱えようとして
いるではないか!（あ!）と、僕が驚きに眼を見開いたそのとき、
僕に気付いたご主人様は、ハッと息を吞んで、印を書くその手を止
めていた。

「……、」

ご主人様。

その一言が出せない僕を前に、ご主人様は苦々しい顔つきで手を
下ろす。ヨーナは大きな溜め息と一緒に胸を撫で下ろすと、扉枠に
ぐったりと凭れこんだ。

「助かったぜ、リオちゃん」

ぼんぽんと頭を叩かれた僕は、胸の底から込み上げてくる憤りに
唇を固く結んでいた。

だけど、それよりも。

「……どうしてですか?」

どうして?

ち！　と、腕の中のミュリが心配そうに鳴いている。

「どうしてご主人様はヨーナさんを目の敵にするんですか？」

「――別に目の敵にしているわけではない」

「ああ、そうそう。気にするなつてリオちゃん」

「ヨーナさんまで、そんなことを言っんですか！？」

僕の声に、ヨーナが弱り顔で肩をすくめている。そんな冗談交じりなヨーナの態度が、僕は余計に腹立たしかった。

「いまご主人様に何かされそうになっていたじゃないですかッ。一緒に暮らしていく以上、蟠りがあるなら、ちゃんと解決していかないと駄目ですよ！　ご主人様だって！」

僕に睨まれたご主人様は、更に渋面になっていた。

「この国で尊まれる魔法使い様がなぜ、画家のヨーナさんに魔法をかけようとしたんですか？　捕縛するって、ちゃんと聞こえましたよ！」

「煩いッ。主人の私が、なぜお前にいちいち説明しなくてはいけないのだッ」

「ご主人様が聞くようなことをされているからですッ。ご主人様にはヨーナさんが悪い人に見えているのですか？　もしそうだとしたら、ヨーナさんもここではつきり誤解を無くすべきです！」

「いや、俺は、ただの画家だし」

「ただの画家……ほう。ただの、画家と言ったか」

ご主人様が銀の目を光らせて、青い殺気を滾らせる。僕も彼を見た。

「ヨーナさんは嘘を吐いているんですか？」

「う、嘘なんて吐いてねーよ。俺は画家です。売れてないけど！」

ぷ！

ミュリがヨーナを指差した。

「ミュリはどう思う？」

「おい、小悪魔に答えを任せるなよ！」

ヨーナの大きな手が、ミュリのちっちゃな口を押さえた。

「俺は間違いなく画家だって！俺の部屋を見ただろ？騙すつもりで道具をそろえるにだって、手が込みすぎているとは思わねーのかよ。ったく、これ以上、どう説明すりゃいいんだッ」

「ならば私の術を跳ね返した楯の印はどう説明する！」

「さっき言った通りさ！俺の爺様の爺様の爺様の爺様の……えつと、なんだかそこらへんの爺様が魔導師だったんだよ！代々口伝

で受け継がれた術くらいは使えるし、そもそも「魔導師」ってのは資格だろうがッ」

「だったらその名はなんだ！ 魔導師ヨウに通じる、その名は！」

「本名だ！ ヨーナの何が悪いってかッ」

やけっぱちに言い返したヨーナに対し、ご主人様は憮然とした表情で腕を組んでいる。まだ納得していない様子に、僕も気持ち落ち着かない。

金の艶やかな髪に黒白の独特な斑髪の二人は、惚れ惚れするくらい絵になるけれど、決していい雰囲気ではないんだ。

仲良くしてほしい。

——僕は切に思った。

押しつけがましいかもしれないけれど、でも。

「僕は……一緒に暮らすからには仲良くなって欲しいです」

すぐには言わないけれど、引っ掛かることがあるなら、ちゃんと話し合いで解決してほしい。

「ヨーナさん。……僕はヨーナさんを信じていいですよね？」

眼鏡越しにじっと見詰める僕に、ヨーナは目尻の垂れた蒼瞳をわずかに見開くと、最後に強張った顔を縦に動かした。

「ご主人様も。ご主人様はいい魔法使い様なのですから、みんなの手本になる存在だと思います」

「……ああ、そうだ」

ご主人様は不服気味に低く返事をした。不機嫌な銀色の目は、よそを向いたきり、僕を見ようとはしてくれない。

「ご主人様」

「話し合いは終わりだ。私は一人になりたいのだ。用が済んだら出て行け」

冷やかな命令のあとで、ご主人様は背を向けた。

「ほら、ご主人様もそう言ってるし、行こうぜ？」

「でも」

ヨーナが僕の腕を掴み軽く引つ張ったが、僕の足は動かない。

「ご主人様、何か胸の内にあるなら、どうか言ってください」

「なにも。さつきも言っただろう？ なぜお前にいちいち報告しなくてはならないのだ？ 邪魔だ！ さつさと出て行け」

「ほら、な、リオちゃん」

僕はヨーナの手を振り払った。

「本当は言いたいことがあるのに、言わないのは一向に構いません。でも言いたいのには言わないで、いらいらしているご主人様の姿を見るのは僕だって辛いです。言いたいことがあるなら、言ってください」

「黙れッ。これ以上なにか言ったら、その声を封じるぞッ」

「——ッ」

居竦む怒声に、僕は息を呑んでいた。

「おまえたちの居住を認めはしたが、私は仲良く楽しく暮らす気など微塵も無いのだ。いちいち話し合いで問題解決をするなどと、くだらない！」

「そ……そんな」

そんな寂しいこと言わないでほしい。

ち！

「黙れ、小悪魔ッ」

ちい。

ミユリまで気魄に負けして、僕の腕の中で縮こまった。

もどかしさに涙が込み上げてきたけど、僕は絶対に泣くまいとして唇を噛み締める。

「ここは私の屋敷だ。私の平穏を壊すというならば、今すぐにでも――」

出て行け、という言葉をも、ご主人様は怒りまじりに飲み込んで、僕を指差していた腕を静かに下ろした。

「不愉快だ」

最後にそう言い残して、ご主人様は図書室を出て行った。

途端に緊張感から解放された僕は、目尻から涙を一粒だけ零していた。慌てて涙を拭くと、急に悲しみが胸から溢れてくる。

「……僕の言いかたが悪かったのでしょうか」

悪かったのかもしれない。

ご主人様を悪者のように言ってしまったかもしれない。

「終わったことだ。気にするな」

いつの間にか来ていたアルトリートが、うつむく僕を抱きしめる。

「ヨーナ、お前もお前だ。どうせ適当に話を返して、レーヴィを怒らせたのだろう？」

「そんなつもりはないけどさあ……。でも、あんまり深く考えるなよ、リオちゃん。さっきのはちょっとした気持ちの食い違いというか、ほら、せつかく一つ屋根の下で暮らそうっていうのに、あいつ一人だけむつつりだろ？俺のほうからフレンドリーに接してみたら、墓穴を掘ったというか……。まあ、深く考えるなって」

「ああ、この馬鹿は墓穴を掘るのが得意だし、あちらは人嫌いで有名なのだ。多少の衝突はやむを得ないと思うぞ。元気を出せ、リオ」

ち！

腕の中でじつと僕を見守っていたミュリも、励ますように大きく鳴いて、僕の肩へと飛び移ってきた。そして僕の頬に何度も何度もほおずりしてくれる。

「こうしてご主人様のお屋敷に集まったのは、一つの運命だと僕は思います」

僕は一つ鼻をすすって、すぐにも微笑んだ。

「旅する船に乗り間違っって、この国へ来てしまったけれど、いろんな人に親切にしてもらいながら、僕はこのお屋敷へ辿り着きました。それってちゃんと意味があると思うんですよ？」

タウトさんに出会うまでも、いろんな人と出会い、この国のことを学ばせてもらった。はじめは寂しくてたまらなかったけれど、いくつもの出会いを繰り返すうちに、僕は折れそうな心を強くすることができたんだ。

この国で出会った人たちは、みんな素敵な人だ。

レーヴィ様だつてきつと素敵だよ。人嫌いのようだけど、僕を庇ってくれたし、信じてくれたもの。きつと心根はいい人なんだ。

「……僕、さっき言ったことは間違いじゃないと思うんです」

「何がだ？」

気持ちを落ち着かせた僕は、アルトリートの腕から離れた。

「ご主人様は本当のことを言いたいのになんか言えなくて、イライラしていることです」

「そらあれだろ？ 素直じゃないって奴だ」

「はい。素直じゃないんです。——素直になれないんです」

「皮肉屋だ」

「そつとも言つな」

アルトリートに、ヨーナが頷いた。

「けっして心根の曲がった人ではありません。でも素直に言えないだけ。だったら僕がご主人様の頑なな心を溶かしたいです」

「やめとけ」

「やめておけ」

二人は即座に返事して、アルトリートだけが美しい貌を嫌そうに顰めていた。

「ああいうのは生まれつきだから、一生治らねーよ。放っておくが一番だ」

「不愉快だが同意見だ。お前が苦勞するだけだぞ」

「すぐとは言いません」

僕は笑った。

「少しずつでいいから、僕はご主人様とわかり合いたいです。だって、ご主人様が笑ってくれたら、絶対に素敵だと思うんです。そうは思いませんか？」

「あー、俺はアリー一筋だからなあ」

言っや、頬に拳が入った。

ちち！ と、驚いたミュリが僕にしがみつく。わかった？ アルトリートさんは怒ると怖いんだよ。ミュリも気をつけてね。

「我々は所詮、居候の身だから、レーヴィの意志には逆らえない。しかしリオが心地好く暮らせるようになるならば、それがレーヴィのためになるならば私も協力しよう」

「ありがとうございます！」

僕はにっこり笑っていたけれど、ヨーナさんはしょんぼりしながら

ら右頬をしきりにさすっていた。

一人また寝室に戻ったレーヴィは、肘掛け椅子のクッションを壁におもつさま投げつけた。

「私は悪者か！」

怪しい男だから術を用いて真意を確かめただけなのに、まるでレーヴィがいじめたようではないか。

リオが来てしまったのは失敗だったが、あの男も太々しい。

「最後まで嘘を突き通すとは……」

祖先が魔導師ならば、多少の魔導力が使えたところでなんら不思議ではない。しかし術となれば話は別だ。

（あれは高度な術だった。しかも私の術を跳ね返したとなれば、相当の使い手ではないか）

それをリオの前で大声で言うわけにはいかずに口ごもるレーヴィを、ヨーナという男は間違いなく逆手に取った。口八丁で嘘を並べて、レーヴィだけならまだしも、リオにまで素知らぬ顔で嘘を付き通したのだ。

（あいっ……）

レーヴィはベッドの上に突っ伏して、毛布を握り締めた。

リオは誤解している。あの男は、——いや、あの二人は絶対に何かを企んでいるはずだが、リオの信頼を勝ち取ってしまった今、不利なのはレーヴィのほうだ。

「くそッ！」

リオの涙顔を思い出して、胸がむしゃくしゃしていた。

枕の耳を掴んでももうさま投げつけると、枕は壁にぶつかってレーヴィの背中に落ちてきた。

「くそッ」

もう一度壁に叩き付けると、ぼうんと気の抜けた音を立てて、部屋の隅っこで大人しくなった。それを忌々しく見詰めながら、レーヴィは奥歯を噛み締める。

「なにが……手本だ」

なにがいい魔法使いだ。

そんなものになりたくて魔導師になったわけじゃない。

「クソッ」

三度目の悪態を吐いたが、伸ばした手の近くには投げつけるものは無かった。

14 .そして我らの夜が来た。

その夜、ご主人様が寝室から出てくることは、結局無かった。

昼食のトレイは部屋の前に置かれたままだし、夕食時間に声をかけたけど返事も返ってこなくて、仕方なく諦めた僕はヨーナとアルトリート、そしてミユリの三人と一匹で、簡単な食事をとることにした。

ランプを灯したキッチンでは、焼きたてのパンと温かなスープを囲んだ慎ましい食事が開かれたけど、僕としてはしょんぼり。

「ご主人様……やっぱり怒ってしまったんですね」

はあ……当然だよな。小間使いがご主人様にあんな偉そうにしてしまったんだもの。しかもまるで悪者みたいに言ってしまった。

「……どうしよう」

このまま嫌われてしまったら。

「まあまあ、今日一日でご主人様の性格がよくわかっただろ？
それだけでもリオちゃんとしては、いい収穫だったんじゃないの？」

「はあ……そうでしょうか」

「そうだって！ だからそうがっかりするなって。腹いっぱい食べて元気出そうぜ！」

ヨーナはミユリにパンの切れ端を次々と与えながらそう言うが、食事の時間くらいは出て来て欲しいなっと思っ。

ち！ 色が優れない僕を氣遣ってか、ほつぺたをパンでもっこもにしたミユリが、食べかけのパンを僕に差し出した。

元氣を出してってことかな？ 笑顔になった僕はパンの小さな欠片をもらって口に入れると、焼きたての甘い香りが口いっぱい広がる。

「おいしい……」

我ながら美味しくできたよ。

慣れない竈だったけど、本当にうまく焼けたのになあ。

このスープだって、豆を裏ごしして滑らかに仕立てたのに。それからそれから、羊の肉が安かったから、香草とワインでよく煮込んで、たくさんの野菜と一緒に炒めたんだ。

あゝあ。味には自信あったのになあ。と、つつい溜め息が出てしまったけど、このままじゃいけないよね。

気まづくなってしまったけれど、明日からちゃんと切り替えて仲直りできるようにがんばらなくちゃ！

「僕、ご主人様がいつおなかを空かせても大丈夫なように、あとで

サンドウィッチを作っておきます」

「ああ、それがいいだろう」

アルトリートが頷く脇で、ヨーナが手を上げる。

「俺の分も！」

「ヨーナ」

「手間は一緒だろ？ それにリオちゃんの作る飯、すげーうまいし。夜は長いぜ、うまい夜食があったら最高だ」

「じゃあ、一緒に作りますね。アルトリートさんは？」

「私は……うん。では頼む」

「はい！」

やっぱり芸術家って夜型なのかな？ 僕はそんなことを思いながら、ミュリにスプーンでスープを飲ませてあげる。

スプーンを両手で掴みながら、顔を突っ込むみたいにして飲んだミュリは、顔を上げた途端に口の周りがスープまみれになっていた。

「ミュリ、顔の半分が緑色だよ！」

僕が笑うと、ミュリは紫色の瞳をきらきらさせて、ちー！ っと？ ぺたに手を当ててしまった。あ！ 手まで緑色！

きゃっきゃ！ と、大喜びしながら僕に手の平を見せているけど、
こらこら、食べ物で遊んじゃ駄目だって。

「あゝあゝ、ひでえ。ミュリ、こっちこい。俺が拭いてやるぞ」

ち！ と短く返事したミュリは、ヨーナの手からするりと逃げる。

「ミュリ、おいで」

アルトリートも苦笑して、ミュリの顔を拭こうと手を伸ばすけど、
スープまみれが気に入ってしまったミュリは、ちょこちょこ上手
に逃げて、最後の最後に僕の胸に飛びついた。

「あゝあゝ」

ヨーナの呆れた声に、僕もがつくり。でも僕に飛びついて大満足
なミュリのきらきらとした笑顔を見たら、怒る気力も失せちゃった。

「ミュリ、サンドウィッチを作るのお手伝いしてくれる？」

ぷ！ ぷ！

もちろん！ という満面の笑顔に、落ち込んでいた僕の気持ちも
癒えていた。

ぼーん、ぼーん——と、廊下の飾り時計が零時の鐘を鳴らすと、ランプの前で読書をしていたアルトリートが本を下ろした。

「時間だ」

「おう」

ソファに寝転んでいたヨーナがのろりと起き上がり、金の髪を掻き毟ったあとで、大あくびと一緒に蒼眼を擦った。その顔はいつになく眠そうで、アルトリートの表情は自然と険しくなる。

「大丈夫なのか？」

「んー、なにが？」

「ひどく眠そうだ」

「ああ、眠い」

と、言ったあとで大あくびしたヨーナは、サイドテーブルの水差しを持ち、コップに移さずに飲みはじめてしまった。

「あゝ……眠いなア、ちくしょう。うっかり術なんて使うんじゃないかったぜ」

「レーヴィとのあれか」

「ああ、咄嗟に高位の楯の印を切っちゃった。おかげでレーヴィには疑われるし、リオちゃんとケンカしちゃうし、大失態だ」

「そう思つなら、関係修復に手を貸してやれ」

「あれ？ リオちゃんを利用することには反対じゃなかったのか？」

「あの子が落胆する顔を見たくないだけだ」

「ふうん。アリーは女子どもに優しいからな」

さてと――と、ヨーナは立ち上がり、夜食の皿を手に持った。

「ここでしないのか？」

「ああ。大きな術を使ったせいで魔導力の蓄えが無い。一点集中でレヴィの寝室だけにする。アリーは俺と廊下で添い寝してくれ」

「警護と言え、警護と」

すこぶる嫌そうに返事しながら、アルトリートは愛剣を手にした。

昼間はクローゼットのなかにひっそり身を隠しているが、夜だけは、さすが剣士だ、愛剣を肌身離さない。ヨーナの眼にも少し妬ける光景だが、剣士となったアルトリートは凜として美しかった。

二人は私室から出て、二階のレヴィの部屋へと急ぐ。

「やばい」

ヨーナが言った。

「封印が消える」

言葉と同時に走り出したヨーナに、アルトリートも追いつく。そして寝室の扉の前に立った瞬間、ヨーナは素早く結界の印を切り、その場に座り込んだ。

「間にあつたか？」

「ああ、ぎりぎり——な」

重たい吐息を付いて、額に浮かんだ汗を拭いたヨーナは扉に凭れていた。

「これで朝までかよ。しんどいなア」

「お前があのと術を使ったからだろう」

「だってあいつ、俺を捕縛して、力を封じようとしたんだぜ？　そら、やべーと思うだろうが。ったく、俺の力を封じて困るのは、寝室でぐうぐう寝ているレヴィ様御自身だぜ？」

「それを言っただけならどうだ？」

アルトリートは横目ですげなく扉を見やり、愛剣を抱きしめた。

「お前が深い眠りにつくと、この屋敷の結界が解ける——と」

「言わなかったって、自分で理解してるさ。今朝の反応を見ただろ？　俺たちが夜に入ってきたと言った途端の、あの青ざめようと思ったら

なかつたぜ」

ふんと鼻で嗤い飛ばして、サンドウィッチに齧り付いた。

「レヴィだつて深刻に考えてるだろうさ。特にあいつは、眠ることで気を溜めるタイプだ。眠らなければ気はたまらない、でも眠れば術が解ける。——これじゃあ「老」としても問題だ。だから俺みたいな奴にも仕事が回ってきたんだけどな」

ヨーナは苦笑する。

「封印術に長けたお前がサポートするのはいい。だが二年経っても未だ改善する様子が無いことが、私にとっては不満の一つだ」

「いいじゃねーか。俺はこういう気楽気ままな暮らしは好きだね。アリーだつて子どもの養育費で金がいるんだろ？　ったく、向こうの連れ子なんだから、アリーが一生面倒見る必要なんてねーだろうが」

「一度は父になった義務だ」

途端に眼を伏せられて、ヨーナはもう少し苦情を言いたい衝動を諦めた。

「アリーは義理堅いねえ。あゝあ……しんど……」

大あくびしながらヨーナはアルトリートの肩に凭れた。

「おい」

「いいだろ、そんなぐらいい」

「嫌だ。離れろ」

別れた女房には律儀に義理立てするのに、幼なじみには昔からアルトリートは冷たい。「ちえ」と、ヨーナが舌打ちして身を起すと、リオの叫ぶ声が遠くに響いた。

「リオ！」

ヨーナが何かを言う前に、アルトリートが剣を持って立ち上がった。

「ヨーナ、お前はここにいろ。私が見てくる」

「あ、ああ」

早口で言い残していった幼なじみに、ヨーナはじっとりと汗をか

く。
「おいおい……夜盗なんて勘弁しろよな」

その「夜盗」からレーヴィを守るために二人はいるのだが、撃退はアルトリートの係で、ヨーナの役目は保護のほうだ。この屋敷に潜入して二年間、二人は気配を殺しながらレーヴィとこの屋敷を守り続けてきたが、夜盗が近付いた気配は一度もなかった。

ところがリオが来て、潜入が発覚したと思えばいきなりこれだ。ヨーナは少しでも体力を付けるようにサンドウィッチを食べると、アルトリートの分にも手を伸ばした。

アルトリートとがリオを連れて戻ってきたのは、それから間もなくしてのことだった。

リオは泣きじゃくり、足下が覚束無い。

「ヨーナ、ミユリが連れ去られた」

アルトリートは言った。

「え！？ そっち？」

おもわず気の抜けた声が出たが、泣きじゃくるリオの様子を見たらこれ以上は何も言えない。

「きっと市場で我々に目をつけていたんだろう。気をつけたつもりだが、後をつけられていたらしい。結界が狭まっていたのが仇となった」

「おいおい……なんだよこれ。泥沼じゃねーか。この街で悪魔一匹探すっていったら大変だぜ？ 黒髪なら下手すりゃ、貴族に売り飛ばされて一生鳥籠暮らしだ」

「ッ」

リオは息を引き攣らせて、大きな眼を見開いた。真ん丸の眼鏡の右のレンズには大きなヒビが入り、頬も赤く、口の端が切れていた。もしかして殴られたのか？

「僕……っ……ミユリを守れなくて………物音がして気がついたら、大勢の人が部屋の中にいて………」

「おい、リオちゃん」

次第に震えはじめたリオは、突然レーヴィの寝室の扉を叩いた。

「僕です！ リオですっ！ ご主人様ッ」

言うや、ドアノブを捻るが、ぴくりともしなかった。鍵はかかっていないはずだが、しかしヨーナが張る結界のせいでドアノブが固まっている。

「ご主人様ッ」

リオはヒビの入った眼鏡の向こうで、大粒の涙をこぼしていた。

「ヨーナ」

アルトリートが腕を掴む。結界を解けと言っているつもりらしい。ヨーナが舌打ちして、呼気とともに印を解除する。途端にドアノブが回って、リオは暗い室内に飛び込んだ。

「ご主人様ッ。お願いです！」

主人の眠るベッドに躊躇わずに飛び込んだリオは、横たわる主人の脇で膝をついた。その声にレーヴィが小さく呻いて、顔をしかめる。

（……結界が戻った）

ヨーナは屋敷じゅうに張り巡らされた結界の復活を肌で感じながら、かすかに安堵の息を吐いていた。

「ご主人様、お願いです！ ミュリを助けてください！！」

「……は？ …………… ミュ、リ……………」

寝惚けた声で返事しながら、のろりと目蓋を開けたレーヴィは、目の前にいるリオの泣き顔と目が合って、これでもかと驚いた顔で肩をいからせた。

「な！」

なんなんだ、お前は！

わずかに声を裏返した様子に、ヨーナは苦笑していた。

室内は真っ暗だが、きつとレーヴィは真っ赤になっているはずだ。その顔が見たくて、ヨーナはランプを探しはじめていた。

15・リオの涙にはかなわない。

小間使い声に眠りの淵から引きずり上げられたレーヴィは、目蓋を開けるなり飛び込んできた涙顔に、全身が総毛立った。

「な！ なんなんだ、お前は！」

おもわず口を吐いた言葉は、自分でもよくわからない。

顔が熱い。なんだこれは。

目を覚ますたびレーヴィの目の前にはリオがいて、それが可愛らしい寝顔だったり、ぎよつとするような泣き顔だったりして、毎回驚かされる。そのたびに頭が混乱しそうになってしまい、レーヴィの声はついつい尖っていた。

「ミユリが誘拐されましたっ！ 魔法使い様、お願いです、ミユリを助けてくださいッ。お願いしますっ！」

「なに？」

「お願いします！ お願いしますッ！！」

涙ながらに前のめりで訴えるリオに、レーヴィは混乱しながらも事態を把握しようと小間使いを凝視したが、視線の向く先は、レン

ズ越しに光る透明な涙に釘付けで、まったく頭が働かない。

「な、なんでお前は……」

なんで泣いているのだ？

「僕が悪いんです！」

リオはそう叫び、わああ……！ と、レーヴィの胸に突っ伏して泣きじゃくった。その声にレーヴィはかすかに残る眠気を吹き飛ばして、はっとする。

「な……っ」

（何を泣いている！）

「なんなんだ、一体……」

リオの肩を掴んだそのときランプに火が灯り、ヨーナが薄笑いでこちらを見た。

「一大事だよ、一大事」

「だから一体何が起きたんだ」

「ミュリが誘拐された」

ヨーナはサンドウィッチを齧りながら返事した。

「市場でミユリを見付けて屋敷まで後をつけてきたらしい。寝静まるのを待って襲ってきたようだ」

「襲っただと……!？」

「すまん。私の責任だ」

アルトリートは剣を腰に差し、鋭利な眼差しでレーヴィを見下ろしていた。その様子は「音楽家」とは到底言い難い雰囲気で、レーヴィはただごとではない空気を強く感じ取る。

まるで剣士だ。黒髪の凛々しい剣士。

「私の屋敷に入ってきたのか？」

「ああ。夜更けを待っていたようだ」

「なんてことだ……」

結界は。

——また結界が破れてしまったというのか？

レーヴィはおもわず頭を抱えていたが、だがそれよりもリオだ。さきほどから泣きじゃくるばかりで、落ち着く気配が無い。

（な、泣き止ませるにはどうしたらいいのだ？）

表面上は冷静を装っているレーヴィだが、内心は激しく同様していた。

（小悪魔一匹でそこまで泣かなくなっただけいいではないか）

悪魔というのは見かけよりも頑丈な生物で、むしろ人間よりも強いというのに惑わされすぎだ。しかしここまで大泣きされると、そんなことを言えるような状況ではないことくらいレーヴィもよくわかってる。

「リオ」

泣くな。

——と言い掛けたそのとき、涙でぐしゃぐしゃになった顔が、レーヴィを見た。瞳がかち合った途端に唇が一字に引き攣って、ブラウンの瞳が涙で揺らぎはじめる。

「リオ、やめろ！」

お前に泣かれたら、レーヴィはどうしていいかわからなくなるのだ。咄嗟に肩を掴んだレーヴィに、リオはまた嗚咽を零して泣きだした。

「ミュリを……ミュリを助けてください……お願いします、ご主人様……僕……」

「わ、わかったから泣くな！ これ以上、私を困らせるなッ」

とにかく、どけ！

リオを引き離れたレーヴィは、逃げるようにベッドから下りると、椅子に掛けっぱなしのガウンを手に取り袖を通した。

「お前が襲われたのはどれくらい前のことだ」

「ま、まだ半刻も経っていませんッ」

リオもベッドから下りて、眼鏡を外した痕で涙を拭った。よく見れば眼鏡のレンズにヒビが入っているではないか。しかも頬が腫れている。

「殴られたのか？」

リオは黙って頭を振って、唇を噛み締めた。

か弱い青年を殴るなんて頭のおかしい連中に違いない。

（私の屋敷に無断で入ったことといい……何者が知らないが、ただでは済まさん！）

「おい、どちらでもいい。すぐに馬車の用意をしろ」

アルトリートとヨーナを次々と指差したレーヴィは、その足で部屋を出た。

「ご主人様、どちらへ！」

「庭だ。お前は先に行ってランプを持って来い」

「はい！」

リオが飛び出すように階下へ降りた。遅れてレーヴィが庭へと下りると、夜闇の中で木々が不機嫌な気配を滾らせながら、待ち構える。

《なにをしにきた怠け者めが！》

「怠けてなどいない！ 私は私の仕事が忙しいのだ、仕方ないだろう！」

さざめく木立に向けて大声を出すと、すこぶる不服だと言わんばかりの気魄が降り注ぐ。一つ一つのその声はとても小さくても、木々の声が重なり合うと嵐のようだ。

「おまえたちがここににいるかぎり、私が主人だ！ 大人しく従えッ。それが嫌ならば図々しく根を張らずにどこへでも行ってしまえ！」

非難罵々だ。――が、木々たちは渋々というように、少しずつ大人しくなると、夜の穏やかな庭が戻って来た。

「あの……今のは？」

「気にするな」

「でも……」

さきほどの様子を見守っていたリオが、怪訝そうにしながら尋ねてきた。その隣にはヨーナがいて、しきりに枝葉を見回している。

あの男といい、さきほどのアルトリートの様子といい、確かめたことは山積しているが、それよりも小憎たらしい小悪魔のことだ。

「この庭に隠れているのですか？」

「違う」

レーヴィは素っ気なく返事して、庭で一番大きな楠の前に立った。

「これよりミユリを見付ける。お前はこの樹に触れながら、あの小悪魔のことを一心に想え。他は一切考えるな」

「は、はい！」

リオは慌てたように楠にしがみついて、ぎゅっと目蓋を閉じていた。

レーヴィが近付くなり手入れ不行き届きに青怒のオーラを滾らせていた楠が、リオに抱きしめられた途端に急に大人しくなる。

ふん。

年寄りとはかく小動物を愛でるものだ。レーヴィは鼻を鳴らして、印を切る。

うお！ と、背後に控えたヨーナが声を出していた。つまりレーヴィが今発動させた術の意味に気付いているのだ。

（あいつ、いずれ吐かしてやる）

内心舌打ちしながらも、レーヴィは術に全神経を傾ける。あの男がどの程度のレベルで魔導術を理解しているのか知らないが、今発動させたこの術は、この国じゅうに生える植物すべてに意識を繋げるものだ。

木々の葉の一枚一枚がすべてレーヴィの目となり、様々な情報を伝えてくる。そのなかでミユリを想うリオの力が、この大楠の木を通して植物たちに浸透していく。

（どこにいる……）

レーヴィは膨大な情報のなかで、あの小憎らしい小悪魔のことを思った。リオを保護者に決めて、すっかり懐いてしまったあの小悪魔は今頃ちいちいと泣いているだろう。

（どこにいる……）

リオを想い、リオの元へ帰りたがっている悪魔の姿を見付けろ。
その声を聞け。

——いた！

レーヴィはカッと眼を見開いた。

窓枠から垂れる蔦の葉が、ちいちいと泣きじゃくる小悪魔の姿を見た。その瞬間、レーヴィは新たに印を切る。

「皆、馬車へ乗れ！ ミュリを取り戻しにいくぞッ」

「ミュリがどこにいるのかわかったのですか！」

「ああ。貧民街の、居酒屋の奥の部屋だ」

「本当に！ 無事なのですか！？」

「今のところはな。急ぐぞ」

「はい！ ありがとうございます、ご主人様！」

ガウンを翻して進むレーヴィに、リオは涙で顔をくしゃくしゃにさせながら隣に並んでいた。

「……泣くな」

「嬉し涙ですっ」

「だったら小悪魔を取り戻してからにしろ」

「はい！」

元気よく返事しながらリオは涙を拭った。そしてこちらを見るなり、笑顔を浮かべたその様子にレーヴィはどうにもこうにも落ち着かなくなる。

レーヴィは少しだけ歩調を早くして、ゆるみそうになった口元を手で押さえていた。それを庭の木々があざとく見付けて小馬鹿にする。

「お前ら！ 私に剪られたいか！」

言っや、木々たちは囁す声をひそめて、くすくすと笑っていた。

16・僕が幸せにしてあげる！ その1

そして僕たち四人は馬車に乗り込むと、ご主人様の荒っぽい道案内で、貧民街のとある一画にある酒場に到着した。

路地裏の奥深くにある薄暗い場所にあるそこは、ひどく怪しげな佇まいで、一見すると酒場には到底見えないところだ。

けれどもくすんだ硝子窓から洩れるランプの明かりで、客が飲み食いしている様子がわかる。

「ここにミユリがいるんですか？」

目的地を断定したご主人様が、何も言わずにシッと素早く印を切った。途端に夜風が音がひたりと止んで、酒場から洩れていた笑い声が音を無くしてる。

「あれ？」

ご主人様の後ろでおそるおそる店内をのぞいていた僕は、ほんのささやかな変化に気付いて眼をぱちくりさせた。小さな変化はアルトリートもヨーナも気がついたらしく、全員の視線がご主人様へと向けられる。

「ここいら一帯を固定した」

ご主人様は素っ気なく言った。

「土や樹、建物すべてを固定した。固定された建物から音は出られない。音も人も」

「えっと……よくわかりません」

「別にわからんでもいい。——いくぞ」

ご主人様が扉を開けると、わ……！ と、店内の喧噪が僕たちを包み込んだ。ご主人様が術をかけた直後に消えた音が、いきなり！

「これってどういうことですか？」

「固定された家から音は出られないんだ。あ、なるほど！」

答えに気付いたヨーナが手を叩くけど、僕はイマイチよくわからない。それって……えーっと？

「それを考えるよりもミュリだろ」

「は、はい！」

ぼんと頭を叩かれて僕は我に返った。そうだ。そうだった！ 僕たちの目的はミュリ奪還だよ！ 大泣きした眼が少ししよぼしよぼしてるけど、僕は大きく眼を見開きながらご主人様の後を追う。

らっしやいッ、と濁った声を出すマスターを横目に見ながら、小狭いカウンターの脇を通り抜ける。

大人五人が入るときゅうぎゅうの店だ。酒と煙草と、なんだかい

ろんな匂いがして臭い。まるで雨の日の舟底みたいな匂いがする。潮の匂いが無いただけまじって感じかな。僕はおもわず手で鼻を押さえていた。

皆の怪訝そうな視線がご主人様に向けられているけれど、ご主人様は知らん顔で店奥の扉へまっすぐに進んでいく。そういえばご主人様はパジャマにガウン姿だった。せめて上着くらいは持つてくるべきだったな。

「おい、どこへ行く」

店主が野太く呼び止めた。それをご主人様は鋭利に睨みつけて、ドアノブに手をかけた。

「おい！」

店主が声を大きくしたが、その瞬間にご主人様が印を切る。店主はひゅつと喉を鳴らして瞠目した。

唇がふるふると震えて棒立ちしているところを見ると、先程の「固定」と同じことになっているのかもしれない。

「待て。私が先に行く」

アルトリートが呼び止め、前に出た。

「あなたに何かあつては困る」

右手は剣の柄を持ち、凜とした表情だ。その様子を静かに見たご主人様は黙って一歩下がると、剣を構えたアルトリートが扉を蹴っ

た。

わ……！

と、驚いた声がして、中にいた数名の男たちが椅子から立ちがかった。彼らが武器を持つよりも早くに踏み込んだアルトリートが、目にも留まらぬ剣裁きで男たちを倒していく。

「アルトリートさん、すごいです！」

部屋はランプ一つきりで薄暗いが、アルトリートは躊躇いもなく疾風の一打を次々と繰り広げていき、男たちは噓れた叫び声を上げながら倒れていった。目にも留まらぬ早さで人が倒れる様子は呆気の一言だ。

「来るなあ！」

あと一人！ というそのとき、残りの一人がミュリの首根っこを掴み、細い首筋にナイフの刃先を当てて叫んだ。

「ミュリ！」

「お前……ッ」

アルトリートは最後の一降りを頭上で止めて、冷ややかに睨み付ける。

「来たらこのガキがどうなってもしらねえぞ」

「ミュリ！」

僕の声にミュリが「ちー！」と大きく泣いて、ちいちいと泣きだした。桃色のふっくらほっぺに大粒の涙が零れて、僕は青ざめる。

「剣を下ろせ！ お前らも道を開ける！」

わー！ 何様のつもりだろう！ 僕がぎりぎりとお歯を噛み締めていると、ご主人様がアルトリートを避け、男の前に静かに立った。

「それを傷つけたら商売にならないんじゃないのか？」

「あ？」

男がたじろいだ。

「黒髪の悪魔は貴重だ。運が良ければ一生遊んで暮らせる金が入るだろうな」

ちち！

ミュリが怒った。僕だって怒るさ！ 大事な大事な家族をお金に換えようなんて絶対に許せない！

「まあ、そんな大事なものを楯にするなんて逆効果だな」

ご主人様が蔑み嗤った。

「それではまるで、我々に返してやると言っているようなものではないか」

そして印を切ると、背後で酒瓶が次々と破裂していく。

状況がつかめない客たちが目を白黒させているが、命令を負った酒はテーブルから床へと滑り、男目掛けて投網のように広がった。

「な……！」

なんだこれは！ という声と同時に男はアルコール臭い網にとらえられて、地べたに転がった。僕はすぐに気付いた。これはお屋敷で見た蛇の術に違いない！ 今度は一本の蛇ではなく、網に変化させたのだ！

（ご主人様すごい……！）

僕は感動と興奮でぶるぶると震えながら、ご主人様の背中を凝視した。

「私の屋敷に許可もなく入った度胸は認めてやるが、今度やったら、一生立ち直れないほどの恐怖を味わわせてやる」

今のご主人様ならやりかねない台詞に、地べたに転がる男は青ざめる。そしてご主人様はちいちいと泣きじゃくるミユリの首根っこを掴むと、僕に向けて突き出した。

「飼い主なら責任を持って泣き止ませろ」

冷たい一言だけど、僕にとっては嬉しくてたまらない言葉だ。

「はい！」と、大きく頷いてミュリを受け取ると、ミュリはきれいな紫色の瞳を大きく見開いて、またちいちいと泣きだした。

嬉しいんだよね！

僕だって同じだよ！

「ミュリ、良かった！」

「ちー！」

ミュリが僕のほつぺたに何度も頬ずりしてきた。

あゝあ、ミュリの涙で僕のほつぺがびしょ濡れだよ。でもいいんだ。だってミュリが帰って来てくれたものね！

笑顔で再会を喜ぶ僕たちの背後から、軍人たちが靴音を響かせてやってきた。青いロングコートが目印の軍人はご主人様に一礼して、素早く中へと入っていく。

「誰が軍を呼べと」

「こういうプロに任せたほうがいいんだよ。さ、俺たちは帰ろうぜ」

大あくびしながらヨーナがご主人様の背中を叩く。ご主人様はたちまち嫌そうに顔をしかめたが、僕と目が合うなり、眉相の皺が薄くなった。

「ご主人様、ありがとうございます！」

につこりな僕に、ご主人様は鼻を鳴らしたただけだけど、その表情は少しだけ柔らかい。

再び馬車に乗り込むと、ご主人様は窓の外を見ながら、ぼんやりとしていた。

僕はご主人様と色々話しがしてみたかった。いろんな魔法を次々と繰り出して、ミユリを救ってくれたご主人様に、いっぱいいい感謝を言いたい。それに魔法のことも。

ああ！ ご主人様はやっぱり魔法使い様です！

僕は素敵な魔法使い様の小間使いになれて幸せです！

「そんな目で私を見るな」

感慨に耽る僕を、ご主人様が嫌そうに流し見た。

「ぼ、僕、どんな目をしていましたか！？」

今、些細なことでも会話できることが嬉しくて、僕はついつい身を乗り出していた。そんな僕を、ご主人様はわずらわしげに見て、背中をを仰け反らせてしまう。

「僕は！ 僕はどんなですか！」

「うるさい！ 目をきらきらさせるな、鬱陶しいんだ！」

少しだけ照れが入った言葉に、僕はまたにっこり笑っていた。

ご主人様は頬赤くしながら窓の外を見てる。

僕は昂ぶりながら思った。

（僕、ご主人様と絶対に仲良しになるよ！ 絶対に仲良くなるんだ！）

心の中で強く誓った僕も、ご主人様と一緒に窓の外を見る。まだ夜だ。外灯の明かりが白く輝いている。間もなくすると、膝の上からミュリの寝息が聞こえて来た。

安心したんだね。

おやすみ、ミュリ。

17・僕が幸せにしてあげる！ その2

翌日。

昨日の騒ぎは夢だったんじゃないかって思えるほどに、平穏な朝を迎えた僕は、朝早くから朝食の準備に取りかかり、食堂に朝食の準備をした。

ミユリは僕の頭の上で落ちないようにしがみつきながら、くうくうと呑気に眠っている。時々「ぷー」と間抜けな声を出して、むにむにやさせているところを見ると、恐怖はすっかり癒えたみたいだ。

（ミユリ、良かった）

頭上の小悪魔に苦笑すると、きれいなお顔に少しだけ眠気の色を残しながら、ご主人様が挨拶もなく現れた。

「おはようございますー！」

「お、……おはよう」

僕が元気に挨拶した途端に、ご主人様は急にぎこちない顔つきになって席についた。

食堂はご主人様がお食事する場所だ。昨日、とことん綺麗にしたから部屋中がきらきらしてる。

ご主人様もそれに気付いたのか、ぼんやりとした眼で方々を見回して、最後に真っ白なテーブルクロスを撫でていた。

昨日まで大きなダイニングテーブルはご主人様が使ったところ以外は埃だらけで、とても触れられるような状況じゃなかったんだ。それをご主人様のお食事前にとことん綺麗にしたのは大正解。

「気持ちのいい朝ですね！」

につこり笑う僕に、ご主人様は「ああ」と眠そうに眼を細めて返事をしてる。僕は急ぎでテーブルに朝食を用意した。

「お前は食事しないのか……？」

「ご主人様のお支度が先ですし、僕は厨房でいただきます」

ふうん。

ご主人様はつまらなそうに返事して、水のグラスを手に持った。

「ばらばらで食べるくらいなら、一緒に食べたほうが片付けも楽だろうに」

「！」

信じられない一言に僕は驚いて、危うく頭上のミユリを落とすそ

うになっていた。

ミュリも今の振動で目を覚ましたのか「ん」っと声を出して、僕の額をぺちりと叩いてる。僕は焦った。ミュリに叩かれたことじやなくて、ご主人様の言葉に焦って、同時に驚いた。

「あのっ……じゃあ、じゃあ、ぼ、僕！ 僕、い、一緒に……いただいて……いいんですか……？」

寝惚け眼のミュリを頭から引き剥がした僕は、おそろおそろご主人様に尋ねてみた。

「ああ、私は気にしない。……そうすればいい」

わ！

ど、どうしよう！ 顔が真っ赤だ。

「ありがとうございます！ い、今、急いで準備しますからね！」

ご主人様と一緒に御飯だなんて、まるで家族みたいだ！

奥様もそうだったんだ。みんなでわいわい食べたほうが楽しいでしょう？ って言って、本当に本当に楽しい食事だったんだ。

大喜びできびすを返したそのとき、アルトリートとヨーナが現れた。

「やっぱさ、俺もそう思ったんだ。な、アリー」

「朝っぱら声をかけるな、気持ち悪い」

「あ、そういうこと言う？」

金色のゆるやかな髪のヨーナは朝から茶目つけたつぷりの顔で、黒髪の美人さんを覗き込む。嫌そうにするのはヨーナの仕事みたいなものかもしれないな。

「ま、飯ってのは、みんなで食うと美味しいよなア」

ヨーナは朝食が山盛りで詰まれたトレイをテーブルの真ん中にでんと置き、手際よく並べていく。アルトリートもグラスと食器類を広げて、あっという間に準備完了だ。

「ちー！」

ごはん！ と、大喜びしながら、ミユリが丸パンに飛びついた。

「よーっし、俺らも食おうぜ！」

ヨーナの声を合図に皆が動きだす。

「！ おまえたちと一緒に食事するとは……いや、なんでもない」

急に賑やかになって、ご主人様は驚いているみたいだ。僕だって嬉しいよ！

「みんなでご飯なんて幸せです」

今日一日のはじまりを、食卓でみんなと一緒に迎えられるなんて

素晴らしい。笑顔の僕をご主人様は少し呆れたように見ながら、あたたかいパンを一口齧った。

「……うまい」

「！」

今、「うまい」って！

おもわず腰を浮かせた僕に、ご主人様は焼きたてのパンをじっと見つめて、また一口千切る。口に入れた途端に「うん」と頷いた姿に、僕は大きなご褒美を貰った気分になっていた。

「レヴィ、リオちゃんの作った飯、美味いだろ？」

ち！ ミュリもパンを抱きしめながらご主人様に向けて何かを言っていた。

僕は今の一言に照れたりくすぐったくなったりで、少しもぞもぞしてる。ご主人様はそんな僕をちらりと見たあとで、手に持ったパンをじっと見た。

「パンはどれもこの味ではないのか？」

「……え？」

「パンの味は全般的に嫌いではない」

「……！」

「まあ、今までの食生活を見るかぎり、味覚が退化していたっておかしくはねーよな」

ヨーナは呆れてる。アルトリートも微苦笑しながら、僕を気の毒そうに見ていた。僕はといえば萎れに萎れながらご主人様を少しうらめしげに凝視する。

パンの味がどれもこれも一緒だって？

全般的につて……全般的につて……？

「な、なんだ？　なんだその目は」

僕の視線に気付いたご主人様は、ぎょつとして顎を引いていた。

上手に焼けたパンだったのに。

ほのかに香る甘みと香ばしさに気付かないなんて……。気付いてくれないなんて……。

「食べ物なんて、腹に溜まればそれでいいのだ」

「！」

「わゝ、言っちゃった。それ最悪の台詞だぜ？」

ヨーナの意見にアルトリートが頷いている。僕は込み上げてくる涙を堪えつつ、ぐつと拳を握り締めた。

僕の料理の味を理解してくれる前に、料理そのものを根元から否

定された気がする。確かに「おなかに溜まるもの」は大事だけど、でも……！」

「おいしいご飯は、みんなを幸せにするんですよ」

僕は言った。

「みんなが今日一日幸せな気持ちになるように、元気で一日を乗り切れるように朝御飯はあるんです！」

ヨーナが頷く。

「ご主人様は食事というものを軽視しすぎています！ これからは覚悟してくださいね！」

「……覚悟って」

「ご主人様のために美味しい料理を作りますから！ ご主人様は「美味しい」というものがどんなものか勉強するといいですよ！」

美味しいは、料理の善し悪しばかりじゃないよ。

楽しく食事することだって「美味しい」に含まれるんだ。それはつまり「幸せ」になるってことの一つなんだ。僕はそう思う。

「覚悟しておいてくださいね！」

僕が毎日腕によりをかけて、ご主人様を幸せにしてあげる！

ちー！ なぜかミユリまで気合いを入れて、ご主人様の前で仁王

立ちしていた。

「いいから席に着け。食事が進まない」

素っ気ない返事をして、ご主人様はミユリの首根っこをつまんで僕に差し出した。

「飼い主なら、私のことをとやかく言う前に小悪魔には食事の仕方を教えてやれ」

「は、はい」

「リオちゃんが飼い主になったってことは、保護者登録する必要があるんじゃないの？」

「登録するんですか？」

「ああ。悪魔の親つてのは、役所で保護者だつていう申請しないと駄目なんだ。そうだろ？」

ヨーナの言葉に僕が小首を傾げると、ご主人様がすこぶる嫌そうな顔をする。

「役所だな」

アルトリートが紅茶を淹れながら、ぼつりと言った。

「早めがいいぜ？ 昨日みたいなことがまた起こったら困るしな。さっさと登録しちまったほうが後々面倒が少ない。リオちゃんだけじゃ危ないし、誰が行く？」

「私が行こう」

アルトリートが名乗りを上げた。

「駄目だ。万が一屋敷に強盗が入ったら困るだろ？ 俺が行く」

ヨーナがひらひらと手を上げた。

「リオちゃん、帰りにデートするか？ まだ街は詳しくないんだろ？」

「え……」

「私が行く」

よくわからずに僕が返事をしかけたとき、ご主人様が慚然とした表情で言った。

「でもご主人様はお仕事が」

「お前のことで役所には一度行かねばならないと思っていた」

「僕のこと、ですか？」

なんだろう？ 僕は小首を傾げる。

「お前が師の紹介ならば、一度は挨拶に行かねばなるまいと思っていたのだ」

「え？ タウトさんですか？」

「いいや」

師イーオだ。

そう言つと、ご主人様はげんなりしながら、溜め息を吐いていた。

18・保護者認定課へようこそ

快晴の朝だ。

僕とご主人様は馬車に乗り込み、アルトリートとヨーナに見送られて屋敷を出発した。

行く先は役所だ。僕がミュリの「保護者」になるための登録をする。——というのが目的らしいけど、それよりもなによりもご主人様と一緒に出かけできることが嬉しくて、僕は朝からそわそわとしていた。

僕のそわそわがミュリにもうつってしまったのか、膝の上の小悪魔までもが、しきりにきよきよとじていて、時折僕の背中に乗ってみたり、ご主人様の膝に渡ろうとして冷たく怒られていた。

ところで今日のミュリはちょっとだけかわいいカッコなんだ。

普段着も大事だけど、いつ何時お出かけするかわからないからって、襟に大きなリボンのついたブラウスを作ってみたんだ。と、言っても、僕が手縫いで作る物だから、細かな細工はないけれど、ミュリの桃色ほっぺによく似合ってる。

僕と目が合うと、ミュリはほっぺをぷくつと膨らませながら、にっこりと笑い返してくれた。

かわいいね、ミュリ！ 今日役所へ行くんだって！

お屋敷から役所まで馬車でさほど遠い距離ではなかった。

なんとなく、旅気分だったから少し拍子抜けかな。でも国が誇る魔導師様が役所まで歩いて行くわけにもいかないし、せっかくご主人様が付き添ってくれるんだから、面倒はかけさせたくない。とはいえ短すぎる冒険だった。

役所の前で馬車から降りた僕は、はじめて見る建物に、感嘆の息を漏らしていた。

「きれいな建物ですねえ！」

役所は、タイルが敷き詰められた玉葱のような屋根をした、大きな建物だった。奥様と世界じゅうを旅して来た僕は、（モスクだ）と一目見て思っていた。ここはまるで教会のよう。一見しても、他の建物とは雰囲気の違い館には、大勢の人が出入りしていた。

まん丸のこの国には、世界じゅうから集まった人たちがいる。そのなかの誰かが、異国の文化を運んで来たのなら素敵だ。

「ち」

ミユリが玉葱屋根の一番てっぺんを指差して、僕の腕の中で身を乗り出した。

「うん。お星様だね！」

きらきらと光る金色のお星様。

「ち！　ち！」

「こっちはお月様！」

「ちー！」

「お天道様だねー」

ミュリはにっこりと笑って、僕の胸にほおずりしてきた。

「……お前は魔導師か？」

「え？　僕がですか？」

ち！

ぼつりと言ったご主人様に僕が小首を傾げると、ミュリがご主人様を指差した。何を言っているのかな？　ご主人様は鼻を鳴らしたあとで、白いロングコートの裾を波打たせながら、何段もある階段を上っていった。

「あ、待ってください！」

ミュリを抱きしめながら僕も追い掛けて、役所へと入る。

警備のおじさん二人が左右の扉を開くと、館内のざわめきが僕たちを包み込む。

扉が開かれたことで皆の視線が僕たちに向けられると、どこからか「あ！」という驚きの声がして、若い女性が駆け寄ってきた。

「魔導師レーヴィ様、ようこそお越しくださいました。今日はどのようなご用件で？」

「私は付き添いだ。この子を保護者認定課へ案内してほしい」

僕の代わりに「ぷ！」とミュリが元気に鳴いて、大きな笑顔になると、女性は「まあ！」と頬を赤くして、つられて笑顔になっていた。

「黒髪の悪魔なんて珍しいですねえ。さあ、どうぞこちらへ。保護者認定課へご案内いたします。レーヴィ様は」

「私は放っておいてくれ」

「ですが、」

「いいんだ。行ってくれ」

「ご主人様は相変わらずぶっきらぼうな返事だ。女性は少し落胆したように肩を落として、僕とミュリを案内してくれる。」

大理石の階段を上がると、荘厳なホールから途端に雑然とした雰囲気になって、廊下は人で溢れていた。僕の腕の中で大人しくしているミュリにみんなが気付くと、「おや」とか「あら」とか目を輝かせている。

「ミュリ、大人気だねえ」

「ちー！」

注目されていることが恥ずかしいらしくて、ミユリは僕の胸にしがみついていた。みんなの様子をちらちらと見ながら、時々「きゃ！」と声を弾ませている。

僕は偶然、ミユリと出合っただけの存在だけど、注目されるとこそばゆいな。少し自慢したくなってしまうかも。

「こちらですよ」

と、女性が保護者認定課のドアをノックした。

『どうぞ』

と、聞こえた声に、僕は笑顔になった。

「あ！ イーオさん！」

「——おや、リオではないか」

重厚な机に向かい、ペン立てに羽根ペンを戻したのは、間違いないくイーオさんだ！

「お久しぶりです！」

「ああ、本当に」

肩に流れるつややかな黒い髪に、品のよい微笑みを始終浮かべている美しい男性は、僕がこの国へ来て間も無くして、少しの間だけお世話になっていた人なのだ。偶然の出会いだ！ というより、僕

は驚いた。

「イーオさんも魔法使い様だったのですか!？」

「魔法使い——？ ああ。そうだよ」

「僕、知りませんでした……っ」

「ははは、言わなかったしねえ」

軽快に笑ったイーオは、ご主人様と同じ制服を着ているし、一緒に暮らしている頃も毎日出勤のときは同じ紋章の馬車に乗っていた。

そうと知っていたら、もっともつといろんなお話をしたのに！
タウトさんもイーオさんも人が悪い。

「——やあ、小さな坊やがいるね」

ミュリに気付いたイーオは机の腕で手を組んだ。

「僕は今、レーヴィ・エルヴァステイ様のお屋敷に、この子と一緒にいるんです！」

「なに？ レーヴィの？ まあいい、かけなさい」

椅子を勧めれた僕が古い革張りの椅子に腰掛けると、案内の女性は一礼して部屋から出て行った。

僕とイーオ、そしてミュリだけになると、壁の古時計の秒針が音を大きくする。

部屋は壁じゅうが本に埋め尽くされて、古い書物の匂いがしていた。イーオの机の上にはたくさんの書類とインク壺、そして上等な羽根ペンがきらきら輝いている。

素敵な部屋だ。僕は奥様の書物庫を思い出していた。

「ちい！」

羽根ペンに興味を持ったミュリが、僕の膝の上からふわりと浮き上がった。

「こら、ミュリ。じっとしてー！」

「かまわないよ。ミュリ、こちらへおいで」

優しい声に誘われて、ミュリがテーブルの上に下りると、羽根ペンの白い羽根を興味津々で撫ではじめた。

「……すいません。悪魔の子っていうのは好奇心旺盛なんですか？」

「人間の子どもにそれぞれ個性があるように、悪魔の子にもちゃんと個性があるものだ。ミュリは羽根ペンが大層気に入ったようだね」

「ちー！ ちー！」

「そうか。なるほどね」

「ミュリはなんて言ったんですか！？」

「この子が卵の中にいるとき、近くにアヒルが住んでいる池があったそう。ミユリはその羽根を一度でいいから撫でてみたいと思っ
ていたらしい」

うー！

唸るような声を出しながら、ミユリが万歳をすると、イーオは小
刻みに頷いた。

「アヒルは尾羽がひよこひよこ動いて、ミユリはそれが好きなん
だそう」

「ミユリ」。アヒルの尾羽に飛びついたら、蹴られちゃうよ」

ぷ！ と、頬を膨らませたミユリは、白い羽根を抱きしめる。市
場へ行くことがあったら、白い羽根を探して何か作ってあげよう。

「ところでリオ、レーヴィの元にいると言ったが、それはなぜだ？
私はタウトにお前を紹介したはずだが？」

「この国にも慣れてきたことですし、タウトさんに働き口を探して
もらったんです。そうしたらレーヴィ様のお屋敷で小間使いをする
仕事を紹介されました」

「ぷ！　ぷ！」

「ふん、なるほど。そこでミユリとも会ったわけだね」

「はい！」

僕は大きく返事した。

「ではここへは？」

「ご主人様と一緒に来ました。ですが、案内の人に僕を任せて、どこかへ行かれてしまったようです」

「ほう。——あの小僧め」

イーオは急に声を低くすると、長い指で顎のラインを撫でながら紫色の瞳を細めていた。ぞくりとするような寒寒しい表情だ。僕は内心しまったと思った。

「ミュリ、少しペンを借りるよ？」

ち！ と、怒ったミュリを宥めながら、イーオが羽根ペンを持つと、短息とともに印を切った。途端、羽根ペンは疾風の矢のごとく空を駆け、一瞬にして姿を消してしまった。

「あれ？」

「ぷ？」

僕とミュリは瞬きしながらイーオを見た。けれど肝心のイーオは遠い目をしながら、印を切った指の先をちょいちょいと動かしている。

「——掴まえた」

ふいにそう呟くと、華やかな美貌に少しだけ意地悪な笑みを浮かべていた。

クツと指を曲げ、透明な糸を手繰るような、ひっぱるような仕種をすると、間も無くして盛大な音を立てながら扉が開かれて、ご主人様が姿を現した。

「ご主人様！」

「ぷー！」

僕とミュリが同時に声を弾ませていた。

けれど妙だ。ご主人様の両足はなぜか宙に浮いていて、まるで釣り針に釣られてしまったような恰好で、しきりに足をばたつかせている。

「イーオさんがご主人様を掴まえたんですか！？」

「ああ。回りくどいやりかたより、こういつのが一番手っ取り早いだろう？」

「そうですね！ でも……」

ミュリがくすくすと笑って、僕の胸に飛びついた。僕もミュリを抱きしめながら、必死に笑いを堪えている。

「みつともないのでやめてください！」

ご主人様の第一声は、すこぶる不機嫌だった。

「師に挨拶もなく資料室で立ち読みしている馬鹿弟子には、当然の対応だと思うけれどね」

「だとしても乱暴です！ 私はこれでも一級魔導師であり、老の役職に就いているのですよ！ こんな間抜けな恰好を民の前に晒すわけにはいきませんッ」

「もう遅いだろう」

ふふん。——イーオの視線は開けっ放しの扉の向こうへと移動していて、僕までつられて大勢の弥次馬を見ていた。

「リオッ、扉を閉めろ！」

ご主人様が怒鳴った。

ご主人様は必死に扉を閉めようとしているけれど、ぎりぎり手が届かない距離にあるらしい。仕方なく僕が扉を閉めてやると、イーオは興ざめたように息を吐いた。途端にご主人様の術が解けて、羽根ペンが床に落ちる。

僕はペンを拾って、イーオに返した。

「師への礼儀よりも、自分の保身を優先するのは感心しないね」

「それよりも、こんな子どもの悪戯のようなこと、二度としないでくださいッ」

「便利だけだなあ。ねえ、リオ？」

「はい！ 僕にもあんな魔法が使えたら、家事がとっても楽になるような気がします！」

「うん。そうだねえ。お前はよく働く子だった。お前がいなくなつたあと、家族みんなが寂しがっていたよ」

「待ってください。師匠！ ということですか？ 師匠はリオを知っているのですか？」

「ん？ うん。少しの間、リオは私の所にいたからね」

「はい！ イーオさんのお宅に一ヶ月ほどごやつかいになって、それからタウトさんの所へお邪魔させてもらったんです」

「……………」

朗らかに答えた僕に、ご主人様は頭を抱えながら呻いていた。

「……………なんだこれは。なにかの嫌がらせか？」

「こら、レーヴィ。嫌がらせとは失礼だな」

途端に師匠が冷ややかに窘める。

「タウトにも言うべきことは多々あるが、まずはお前だ。レーヴィ、ここへ座りなさい」

そう言うと、イーオはもう一つの椅子を指差した。

魔導師イーオの口調は、僕のと看とはまるで違っていて、おもわず苦笑しちゃうくらいに迫力がある。

弟子にとっては有無を言わさぬ師の態度に、ご主人様は渋々と椅子に腰掛けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2072s/>

リオと惑いの魔法使い

2011年10月10日11時56分発行